平成二十五（二〇一三）年度

ニューヨーク補習授業校

第二十三回

作文コンクール

入選作品集

協賛　パナソニックノースアメリカ様

愛読書

「作文コンクール入選作品集に寄せて」

校長　櫻井　郁男

テレビ・ゲーム・インターネット・携帯・スカイプ・ツイッター・ライン・・・日本人はもとより数十億人の活字離れは、私が中学生の頃から始まり、読書の習慣はもちろん、まとまった文章をしたためる機会は年々少なくなっているようです。

「敦煌」という映画のラストシーンには、自らの命が奪われる直前まで経典を隠す主人公が描かれています。窟に隠された大量の経典などは「敦煌文書」として世界各国で研究が進み「敦煌学」という研究分野が生まれるまで発展しています。これより遙か昔、文字とパピルスは、情報や知識の伝達と知恵の継承を可能とし、人類の繁栄を支えてきました。さらに印刷技術の向上により、特権階級だけのものであった知識や情報に庶民も触れることができるようになりました。

従って、冒頭に否定的に触れたインターネットは、「瞬時に・同時に」情報を得られ今では双方向に情報の交換ができることから、革命的な意味を持っています。

さて、補習校事務所の校長室には「作文コンクール」の作品集が大切に保管されています。紐解くと、ときどきのニューヨークの世相、補習校生活の様子が、先輩方のみずみずしい感性で綴られています。原稿用紙の行間からも伝わる皆さんの感動・感想・考えは、一文字一文字から確実に伝わり、書物・書籍の良さを再認識できます。

自宅には中学時代の生徒会誌「東嶺」が姉の分も含め、五冊並んでいます。時折手にして、皆さんと触れ合うためのヒントをもらったり「我が師」の教えに、改めて胸を打たれたりしています。

今年も皆さんの貴重な経験や日々の思いを綴った「作文集第二十三号」ができあがりました。言語のあるところに文化が繁茂することは、独自の言語を失った人々の今を顧みれば明らかです。補習授業校で学ぶ皆さんにとって、日本の文化を受け継ぐことの大切さを、お友達の作品を味わいつつ再認識してください。そして、世界のどこかで必ず再会する学友との「共に生きた証」ともなる本誌を、あなたの作品も挟んで、大切な愛読書にしてください。

【目　　次】

◇「作文コンクール入選作品集」によせて　校長　櫻井 郁男
第二十三回　作文コンクール児童・生徒入選作品
◇せみのようちゅう　L－校　初等部一年　ケンピナス 勇
◇じてん車にのれたよ　L－校　初等部一年　滝澤 知歩
◇グッド、シチズン　W校　初等部一年　中井 優芽
◇わたしのあさがお　W校　初等部一年　佐藤 祐希
◇ヨーロッパりょこう　W校　初等部一年　高橋 綺星
◇イギリスへのたび　W校　初等部一年　ジョーンズ 嶺
◇りんごがりとトマトがり　W校　初等部一年　的場 玲奈
◇さよならエース　L－校　初等部二年　園 慈瑛
◇かいじゅうりゅう　L－校　初等部二年　加来 想一郎
◇ファッションショー　L－校　初等部二年　北口 夏乃
◇アメリカ生活　W校　初等部二年　西垣 勇飛
◇お泊まり会のこと　W校　初等部二年　武田 麻奈
◇わたしのおとうさん　W校　初等部二年　原口 舞千
◇アップルピッキング　W校　初等部二年　大場 まりん
◇わたしのたからもの　W校　初等部二年　荒木 芽依
◇ヘレンケラーと私　L－校　初等部三年　橋本 游羽
◇ぼくのかえるさん　L－校　初等部三年　水上 真吾
◇ジュピター　L－校　初等部三年　ウォーリン 海
◇わたしの家に遊びに来る動物たち　W校初等部三年　市坂 玲奈
◇ぼくと読書　W校　初等部三年　中村 泰
◇リサイクル　W校　初等部三年　山下 颯太
◇秋のカナダりょ行　W校　初等部三年　小宮 啓永
◇大切なもの　L－校　初等部四年　髙木 蓮奈
◇持ちつ持たれつタリとタラ　L－校　初等部四年　フシロ タラ
◇ぼくの周（あまね）　L－校　初等部四年　大日方 柊
◇おつかい　W校　初等部四年　那須 咲代
◇アメリカと日本のちがい　W校　初等部四年　根本 凌太朗
◇わたしのゆめ　W校　初等部四年　原口 華那
◇僕のにわとりたち　W校　初等部四年　林 連太郎
◇波の上で　L－校　初等部五年　吉田 禅
◇ぼくの初めての犬　W校　初等部五年　パルミエリ ケイシー
◇カリフォルニア州への旅　W校　初等部五年　立本 浩大
◇宇宙にたった一つしかない地球　L－校初等部六年　笠井 勇汰
◇運動会　W校　初等部六年　三井 大輝
◇九・一一メモリアルに行って　W校　初等部六年　山本 琉晟
◇忘れられない瞬間　W校　初等部六年　北出 航太朗
◇技術の未来　L－校　中等部一年　平形 将都
◇別の世界　L－校　中等部一年　吉藤 杏菜
◇クーパーズタウン　W校　中等部一年　都甲 健太
◇私は何人なんだろう　W校　中等部一年　面 みあ
◇戦争と教育　L－校　中等部二年　北川 澪那
◇こたつ　W校　中等部二年　阿部 紘子
◇アメリカの生活　W校　中等部二年　和田 元基
◇私の夢へグランジュテ　L－校　中等部三年　モンゴメリー花子
◇オリンピックの本当の目的　W校　中等部三年　垰 さくら
◇日本人として考えなければいけないこととは　W校　中等部三年　三井 寛子
◇差別とは　L－校　高等部一年　柴田 奈央美
◇補習校で学んだこと　W校　高等部二年　安倍 結花

「せみのようちゅう」

L－校　初等部一年　ケンピナス 勇

ぼくは、じいちゃんとせみがりにいったらせみのようちゅうを見つけました。さわったらぬれて、かたかった。いろがこくてちゃいろでした。

ようちゅうをじいちゃんとばあちゃんのおうちにもってかえって虫かごにいれました。

そのよる、せみを見にいったらあたまがからから出てました。

「みんな見てー」

ぼくがいいました。みんながきたら、せみをみんなに見せました。

せみのはねが小さくてムニャムニャでした。すごくきれいなみどりいろでした。

ぼくがおふろにはいりにいったら、じいちゃんがせみをえだにつけてぼくに見せにきてくれました。はねがすごく大きくなっていました。

つぎの日、せみがおとなでした。みんなにみせたあと、せみをにがしました。

ぼくはせみがだいすき。

せみはすごくげんきよくとんでいきました。ぼくはうれしかったです。

「じてん車にのれたよ」

L－校　初等部一年　滝澤 知歩

「どっしん。」

じてん車がたおれて、わたしは、しりもちをつきました。

わたしは、なつ休みに、こうえんで、いとこのおねえちゃんと、じてん車にのるれんしゅうをしました。あつくて、あせがだらだらでました。のどもからからです。ごくごくと水をのんで、もう一かいです。なんかいのってもころびます。でもぜんぜんいたくありません。

いとこのおねえちゃんが、じてん車のうしろをもって、いっしょにはしってくれました。犬のアンジーも、いっしょにはしってくれました。そのときです。ふわっとして、あしが、ぐるぐるまわりました。わたしは、こわくなって、ブレーキをぎゅっとふみました。

「しいちゃん、できたね。」

と、おねえちゃんが、はしってきました。わたしは、とうとう、じてん車にのれたのです。はやくおかあさんに見せたい気もちになりました。

「グッド・シチズン」

W校　初等部一年　中井 優芽

わたしの学校では、まい月、「シチズン・オブ・ザ・マンス」がえらばれます。これは、クラスで一ばんいいことをした子がなれます。

こんかいは、わたしがえらばれました。もんだいがとけないおともだちをたすけたり、せんせいのお手つだいをしたりしたからです。えらばれて、びっくりしたけどうれしかったです。

「シチズン・オブ・ザ・マンス」になったので、わたしのしゃしんとじこしょうかいが学校のいり口にはられます。じこしょうかいには、わたしのすきなべんきょうのことや、学校で一ばんすき

なことをかきます。それから、バイオリンのこともかきます。学校にくるみんなに見てもらえるのがうれしいです。おとうさんとおかあさんもよろこんでくれました。

また「シチズン・オブ・ザ・マンス」にえらばれるようにみんなのやくにたつようになりたいです。それから、学校だけじゃなくて、「グッド・シチズン」でいられるように、いつでもこまっているひとをたすけていきたいです。

「わたしのあさがお」

W校　初等部一年　佐藤　祐希

わたしは、あさがおをそだてています。それは、にほんからあそびにきていたおばあちゃんが、

「あさがおをそだてて、おしばなをつくりましょう。」

といったからです。

それから、おかあさんが、はちをかってきて、七月十二日にたねをまきました。まいたらめがでてきて、どんどん大きくなりました。けれども、はながさくのはおそかったです。九月十七日にさきました。

きょねんもあさがおをそだてたけど、ひっこしをしているときにたおれてしまいました。それでもういっかいたねをまいたけど、はなはさきませんでした。

ことしは、まいにち四こくらいさきました。さいしょにあおむらさきのはながさきました。そのあと、しろいはなとピンクのはながさきました。わたしはうれしくて、あさがおのはなにチューってキスしました。そして、わたしは、

「いろ水をつくろう。」

といいました。そしたら、おとうさんが、

「もっとたくさんさかないと、つくれないよ。」

といいました。わたしは、がっかりしました。

らいねんは、もっとたくさんはながさいたらいいなとおもいました。

「ヨーロッパりょこう」

W校　初等部一年　高橋　綺星

イタリア、ドイツ、フランス、オランダ、ベルギー、スイス、オーストリアへりょこうに行きました。

日本にいるおじいちゃんとおばあちゃんとドイツのくうこうでまちあわせをして、車をかりて七つの国に行きました。

一番見ておどろいたのはフランスのエッフェルとうでした。フランス人のともだちに大きなタワーがあると聞いていたので、楽しみにしていました。思っていたよりずっと高かったです。とても大きいので、おじいちゃんは地面にねて、しゃしんをとっていたので、みんなわらってしまいました。

スイスではマッターホルンを見るために電車にのりました。まどから見えるけしきが草原からゆきげしきになり、とても寒くなりました。電車をおりた時にはきもちわるくなってしまいました。おばあちゃんに「こうざんびょう」だと言われました。すこしして、山のてっぺんにいたセントバーナードという犬と遊んでいたら、なおりました。犬はとてもかわいかったです。でも、首におもそうな物をつけていて、かわいそうでした。マッターホルンはとがっていて、小さい山にかこまれて、王さまのようでした。とってもきれいだったので、お父さんとお母さんからたん生日にも

らったカメラでたくさんしゃしんをとりました。
色々なのり物にのったり、色々な物を見たりしたので、とても楽しかったです。

「イギリスへのたび」

W校　初等部一年　ジョーンズ　嶺

ぼくは、なつやすみにイギリスへいきました。イギリスにはおじいちゃんとおばあちゃんがすんでいるので、なんかいもいったことがあります。でも、こんかいは、おにいちゃんとふたりきりでいきました。

ふたりだけでひこうきにのるのははじめてなので、ぼくはドキドキしました。とうじょう口で、パパとママとおわかれするとき、てやあしがちょっとブルブルふるえました。でも、イギリスにいくのはたのしみだったので、ワクワクもしました。パパとママにハグをして、

「ママだいすきだよ。」

といって、わかれました。

ひこうきのなかでは、テレビをみました。そのあと、ねて、おきたとき、ぜんぶわすれていたので、ママがいなくておどろきました。びっくりして、あしがうごきませんでした。でも、よこをみたら、おにいちゃんがいたからほっとしました。

ロンドンについて、おじいちゃんとおばあちゃんのかおをみたら、あんしんしました。

ふたりでイギリスにいくのはさいしょはこわかったけど、イギリスについたらたのしかったので、またおじいちゃんとおばあちゃんにあいにいきたいです。

「りんごがりとトマトがり」

W校　初等部一年　的場　玲奈

「うわぁ。おいしそう。」わたしは、おかあさんにいいました。わたしがとどかないところに、たくさんのあかいりんごが、なっていました。いちばんあかくておいしそうなりんごを、おかあさんがえらんで、わたしがとりました。みどりとあかいりんごをたべました。

りんごを九こ、トマトを三ことりました。口にはいらないくらい大きいトマトをとりました。トマトは、あかくて、あまくて、いままでたべたなかで一ばんおいしかったです。

オレンジいろの大きなかぼちゃとしゃしんをとったり、もちあげたりしました。

アップルサイダーやドーナツもおいしかったです。

来年も、おかあさんとおとうさんとりんごがりにいきたいです。

「さよならエース」

L一校　初等部二年　園　慈瑛

一年前赤くてかわいくてたべかたがこわい魚がぼくの家にやってきました。

「このこの名前何にしようか。」

と、お母さんが聞きました。弟は、

「かっちゃんにしたい。」

と、言いました。だけどぼくは、

「もっとかっこいい名前がいいな。エースがいい。ウルトラマンエースのエースだ。」

と、言いました。
エースに毎日えさをあげるのをたのしみにしていました。エースはベタという魚でおこるとえらをひろげます。まるでライオンのようでした。
ある日エースとこえかけても元気がないことに気づきました。つぎの日、おなかが上をむいたエースがいました。お母さんはエースをおはかにいれてとたのみました。でもお父さんはいそがしくてできませんでした。お母さんが
「なんでエースちゃん、おはかにはいってないのーーー！かわいそうにーーー！」
と、さけんだのでお父さんは夜おそくに木の下にうめました。しんだエースのかおがこわかった。お母さんはもっとこわかった。さよならエースちゃん。

「かいじゅうりゅう」

L一校　初等部二年　加来　想一郎

ぼくには、七こ下のおとうとがいます。十月で一さいになったばかりです。名前は、りゅうじろうといいます。ついこの前までは、ハイハイしかできなかったのに、今はどこへでも歩いて行きます。
おかあさんはりゅうじろうのことを
「かわいい。」
と言うけど、ぼくは時どきりゅうじろうが、かいじゅうに見えます。
ゆかにおちているものはなんでもたべるし、おもちゃも手当たりしだいかぶりつき、しまいにはそれらをぜんぶ口からはき出します。まるで小さなかいじゅうです。ぼくは、おとうとのことを「かいじゅうりゅうちゃん」とよんでいます。
かいじゅうりゅうちゃんは、ぼくのことをこうげきします。ぼくがカウチでねている時に、ばんざいをしながらおもいっきりあたまをたたきます。
「やめて。」
と言えば言うほど、さらに強くパンチをします。ぼくが本気でおこるとかいじゅうりゅうちゃんは、なきながらおかあさんのところへにげていきます。すごくにくたらしいと思います。
でもかいじゅうりゅうちゃんは、自分で高いところに上ったのにおりられなくなると「エンエン」とあまえてぼくにたすけをもとめてきます。そんなりゅうちゃんは、とてもかわいくてかいじゅうだったことをわすれます。そしてぎゅっとだきしめてベッドにおとします。
ぼくのかいじゅうりゅうちゃんは、わるいこともするけどとても大すきです。

「ファッションショー」

L一校　初等部二年　北口　夏乃

「では、あなたのお名前は何ですか。」
「ポケモンです。」
わたしは友だちのいえで、ぬいぐるみファッションショーをしていました。人形は、しつもんにこたえてだいを下りて、つぎの人形が入ってきました。
コロンバスデーのれん休に、わたしはかぞくで、しん友のいえにとまりに行きました。一日中あそべるのでビデオを見たり、自

てん車をすごくはやくこいだり、ＢＢＱをしたりしました。そしてさいごに、ぬいぐるみファッションショーをしました。ショーには、ぬいぐるみが四人さんかしていました。ぬいぐるみたちには、一人ずつデザイナーがついていました。チャイナドレスや、サマースカートをきたぬいぐるみが、くつのはこのステージにのって、しつもんにこたえました。

「とくいなことはまほうです。」

とわたしのモデルは言いました。ほかの子は、へんしんやおしゃれとこたえました。人形は、かべのかざりだなのランウェイを、一人ずつあるいてふくを見せました。わたしのモデルは、手をこしにあてて、スカートのはしをもってポーズをしました。

わたしのモデルが一ばんかわいくて、ドレスアップできていたと思いました。わたしは、自分もモデルになることをそうぞうしそうになりました。でもわたしは、うちゅうひ行しになりたいので、モデルのゆめは、すぐにどこかへ行ってしまいました。

「アメリカ生活」

W校　初等部二年　西垣　勇飛

ぼくは、今年三月二十七日にアメリカに来ました。ぼくは、アメリカにひっこすときまってから、友だちがいないと泣いていました。だけどアメリカの家について、車をおりたら、となりの家に日本人がいて声をかけてくれました。そして、つぎの日に、いっしょにあそんでたのしかったです。一ばんさいしょに声をかけてもらったときは、すごくうれしかったです。

ぼくが、アメリカに来て日本とちがうところはたく山あると思いました。たとえば、アメリカは何でも、ものが大きい、うわばきをはかない、ランドセルをしょって行かない、スナックをもって行く、ほかにもいろいろなことがちがうけど、一ばんくろうしているのは、言ばです。そして、学校でＥＳＬをしたり、友だちとあそんだり、しゅくだいをしたり、えい語の本を読んだりと、いろいろやっていて、少しずつえい語がしゃべれるようになってきました。でも、もっとえい語がしゃべれるようになりたいです。そして、えい語がしゃべれるようになったら、友だちといっぱい話をしたいです。

「お泊まり会のこと」

W校　初等部二年　武田　麻奈

わたしは夏休みにえみりちゃんの家で、ときこちゃんとお泊まり会をしました。なぜならば、ときこちゃんが帰国するからです。この時一ばんたのしかったのは、ダンスショーとねる前の時間でした。

夕食時にえみりちゃんが

「みんなでおどろう。」

と言いました。そこで、三人でやくわりをきめました。えみりちゃんがふりつけで、ときこちゃんとわたしは出ばんをきめました。えみりちゃんのママがピアノのえんそうです。

まず、一回目のれんしゅうは、えみりちゃんが「きふ人のじょうば」と言うきょくに合わせておどり、わたしとときこちゃんはまねました。二回目、三回目は、ドレスをきてこきゅうを合わせました。

いよいよ本ばんがきて、えみりちゃんが、

「一、二、三。」

と言うと、えみりちゃんのママがピアノをはじめました。わたしはまちがえるかもしれないと思い、きんちょうでむねがドキドキしました。でも、みんな上手におどることができました。

おわると九時をすぎていたので、えみりちゃんのママは、

「もうねなさい。」

と言いました。みんなふとんに入り、ねるふりをしました。でもまたおき上がって、ランプの明かりでしずかにあそびました。さいしょからねたふりをしてあそぼうとやくそくしていたからです。

このお泊まり会の後、ときこちゃんは日本に帰りました。いつかえみりちゃんとわたしも日本に帰る日が来ます。その時もまたお泊まり会でいっしょにおどりたいと思います。

「わたしのおとうさん」

W校　初等部二年　原口　舞千

わたしのおとうさんの名前は、しゅう一ろうです。わたしのおとうさんは、土曜日も日曜日もおしごとに行きます。しゅっちょうもよく行きます。アメリカで日本人のスポーツせんしゅのしゅざいをしに行くからです。一か月に、二回ぐらいしか帰ってきません。だから、ほとんどおとうさんとあそべません。電話でいつも、

「せかいで一ばん大すきだよ。」

と言ってくれます。だから、さみしくありません。

お休みの日、いっぱいあそんでくれます。おとうさんが手と足をもってブランコをしてくれます。力もちだと思いました。たまに、わたしがすきなどうぶつ園やプールにつれていってくれます。プールでは、とびこみのしかたを教えてくれました。おとうさんは、とびこむのが上手だと思います。おとうさんがとびこむと、イルカみたいだからです。

「あたまのてっぺんから入るんだよ。」

と教えてくれました。何どもいっしょにれんしゅうをしていたら、わたしもイルカみたいにとびこめました。おとうさんはにこにこしてよろこんでいました。おとうさんのにこにこした顔が大すきです。

「アップルピッキング」

W校　初等部二年　大場　まりん

日曜日、アップルピッキングに家ぞくと行きました。初めて行くので、とても楽しみで、その日は早おきしてしまいました。

ファームにつくと、見たことのないくらい広い草原が広がっていて、そのおくにトトロの森みたいなものが見えました。はじめにあみぶくろを買いました。りんごを入れるのに使うそうです。そして少し歩くとようやくりんごの木が見えてきました。一本の木に山のようにりんごがなっています。一つ食べてみたいなあと思っているとお父さんが高いところのりんごを長いさおでとってくれました。食べるととてもすっぱかったのでおどろきました。もっと赤いりんごをとろうと、私はいっしょうけんめいにさがしました。そして長い間かかってふくろいっぱいになりました。それは、かかえてはこべないほどおもくなっていました。そこで私たちはりんごのふくろにさおを通してはこぶことにしました。お父さんとお母さんがさおのはしをかつぎ、私はまん中のふくろをささえます。何回か休みましたが、思ったよりはおもくなかった

のでよかったです。
家に帰ってからりんごを数えてみました。りんごは六十二こもありました。毎日学校にもって行ったり、お母さんがアップルパイを作ってくれたりしました。とても楽しかったので、またいきたいなあと思います。

「わたしのたからもの」

W校　初等部二年　荒木　芽依

「あれ、頭の上がふわふわだ。」
わたしは、まだゆめを見ているのかと思いました。頭の上をさわってみると、やわらかい雲が頭にのっているみたいでした。
「いたたたた！」
わたしは大きな声を出しました。目をあけたら、黒いねこが見えました。ねこは、「おはよう、めいちゃん。」と言うみたいに、わたしの顔にスリッとやってきました。わたしのねこのマーちゃんです。
マーちゃんは、わたしが五才のときにもらってきました。ちゃ色のハーちゃんとは、きょうだいのねこです。
わたしは、ねこたちが小さいころから、大じにそだてきました。ねこたちがぐあいがわるいと、心ばいで心ばいでねむれませんでした。
マーちゃんとハーちゃんが、ごはんをたくさん食べたあと、ポンポコリンのおなかを出してねています。こちょこちょしたいぐらいかわいいです。トランペットの先生のくつの中に入ろうとして、さか立ちをしてしまうと、手つだいたくなります。
もし、マーちゃんとハーちゃんがお話しできたら、わたしのことをどう思っているのかを聞いてみます。大じな家ぞくだと言ってくれたらうれしいです。わたしが聞かれたら、「たからものだよ。」と言います。大切な大切なたからものです。

「ヘレンケラーと私」

L一校　初等部三年　橋本　游羽

私はニューヨークのフォレストヒルズという町に住んでいます。フォレストヒルズはニューヨークのこう外にあり、木々に囲まれて、鳥のさえずりがいつも聞こえてきます。ヘレンケラーさんも生きていた時に、同じフォレストヒルズに住んでいました。
ヘレンさんは二才の時にびょう気になって、目が見えなくなって、耳も聞こえなくなってしまいました。障害をかかえていたために、とてもたいへんな人生を送ったと思います。けれども、アンサリバン先生の力をかりて、ヘレンさんは大学に入って、社会のために働きました。
今年の夏、私は「三日間見えたら」というお話を読みました。このお話はヘレンケラーさんが書いたエッセイです。このエッセイは、ヘレンさんがそうぞうの中で、もし三日間だけ目が見えたら、何を見たいかについて書いています。
このエッセイを読んだ時、色々な考えが頭の中をぐるぐると回り出しました。それは、ヘレンさんが色々な問題について話してくれたからです。たとえば、ヘレンさんは目が見える人は、目をそんなにつかわないこと、そして耳が聞こえる人は、聞こえて来る音にそんなに注意をはらわないということを言っています。ここを読んだ時、はじめ私はヘレンさんにせめられているような気持ちになって、少しおこってしまいました。でも読んで行くうち

に、考えてみたら私もお母さんがたすけをひつようとしていることを見ているのに、自分のことしか考えていないで、気が付かなかったり、物を見る時に、通りすぎるように見てしまって、こまかいことをちゃんと見ていないことに気が付きました。ヘレンさんはみんなへ五感を大切にするように、と勇気づけていることを知りました。ヘレンさんには、三日間でたくさんの見たい人や物がありました。私がとてもすごいと思ったことは、ヘレンさんが見たいと思っている人やげきや場所のせつめいをしている時、私もヘレンさんのとなりにいて、それらのけしきをいっしょに見ているような気持ちにさせられることでした。見たり、聞いたりする代わりにヘレンさんは手でさわって世界をかんじます。ヘレンさんのかんじている世界は、とても明るく生き生きとしています。

私のお母さんも目が見えないのでお母さんに聞いてみました。

「目が見えたら、一体何を見たい。」

お母さんは、

「まずあなたの顔とあなたが書いた絵や作文を見てみたいな。」

と答えました。私には、お母さんといっしょに見たいな、と思う物がたくさんあります。でも今はいっしょに見えません。だからお母さんに見てもらうには、お母さんに何がおこってるか、言葉でせつめいをしたり、手でお母さんに物をさわらせてあげます。ヘレンさんも、きっとさわって見るだけではなく、だれかがせつめい　をしてくれる言葉で、世界を見ていたのだと思います。見えない人にとって、言葉の力はとても大切なのです。

フォレストヒルズの道を歩いている時、風がふいて、この風もヘレンさんがかんじたのかなと思って、ヘレンさんのかおりをかいでいるような気持ちになります。それは、人間のけんりのために、たたかう強い人のかおりです。

私は人のよろこぶことをしたいと思っています。人がよろこぶ時、私の心もよろこびます。私は、ほかの目が見えない人たちに、たくさんのことを知ってほしいと思います。だからもっと本を読んだり、べん強をしたりして、私の中の言葉をいっぱいふやしたいです。そして私が今持っている体を大切につかって、ヘレンさんのように、人のために強い人になりたいです。

「ぼくのかえるさん」

L－校　初等部三年　水上　真吾

おばあちゃんのいるしせつは、青森県南部町にあります。うちから車で一時間ぐらいです。ぼくは、夏休み中、何度も何度もおばあちゃんに会いにいきました。

ある日、雨がやんだので、ぼくはしせつのうらの田んぼにさんぽに行きました。草は雨つぶでぬれていました。ぴょんぴょん、何かが足もとではねました。

「あっ、かえるだ。」

ぼくはうれしくなって、つかまえようとしました。だけどかえるはとてもすばしっこいのです。やっとのことで二ひきつかまえました。

お母さんが、おさしみの入っていた入れものに入れてくれました。よそのおばあさんに見せたたら、

「かわいいね。」

と言ってくれました。かんごしさんに見せたら、

「きゃああっ。」

とさけんでにげて行きました。

おうちにつれてかえって、小さながをつかまえて、ケースに入れてやりました。かえるはすぐさま気がついて、ぴたっとし線を合わせます。ぴょんぴょん近づいてじいっとエサを見つめます。きんちょうの一しゅんです。そしていきなりがにとびついてパクッと食べました。見事です。

ぼくは、おもしろくって、一生けん命がをつかまえてあげました。ありを入れたら、かえるはにげ回りました。

ぼくは、かえるを田んぼに返してあげることにしました。ずうっと一しょにいたかったけれど、もうすぐアメリカに帰るのです。

ぼくは、かえるをそうっと車にのせました。と中でお店によって、おばあちゃんへのさし入れを買いました。

車にもどり、かえるを見ました。

「あああああっ。」

ぼくは、悲めいをあげました。一ぴきは、白いおなかを上に向けてのびていました。もう一ぴきは、そのままのしせいで動かなくなっていました。

「かえるくん、かえるくんっ。」

ぼくはいっしょうけんめいさけびましたが、もう、びくとも動きません。熱中しょうで死んだのです。

ぼくとお母さんは、悲しい気もちでしせつに向かいました。そして、死んだかえるをもとの田んぼにかえしてあげました。

「かえるくん、きみの大好きな田んぼだよ。」

かえるくんの大好きな田んぼだからきっと生き返るよね。そう思いながら、かえしてあげました。

「ジュピター」

L－校　初等部三年　ウォーリン 海

僕は、家族で、ジュピターというアフリカンジャーディーンの鳥をかっています。

ジュピターは、昨年の夏にテキサス州から四週間の赤ちゃんの時、一ぴきで飛行きに乗ってニューヨークまでやって来ました。家族でシリレジに赤ちゃんの鳥の食べものを入れて、一日三回ジュピターに食べさせました。ジュピターは、赤ちゃんの時からかっているので、僕たちにとてもなついています。ジュピターは、赤ちゃんの時は、頭にだけしか毛がありませんでしたが、今は、緑色と黒、少しオレンジ色の入ったとても美しい鳥です。ジュピターは、二十センチ位あります。ジュピターのせいかくは、人なつこくとてもがんこです。僕が本を読んだりべん強していると、僕のかたや、ひざの上にのっています。また僕たちがカード遊びをしていると、飛んできて、サイコロをなげて、カードをひっくり返そうとします。また、いたずらが大好きで、僕のえんぴつを取り上げて、えんぴつをこわしてしまいます。この作文を書いている間も、僕のひざの上にすわっていたり、僕の周りをウロつき、「遊ぼうよう。」とうったえています。ジュピターは、いつもは、鳥かごが、家の中を自由に飛んですごしています。たまに鳥かごのかぎをかけて出られないようにすると、ジュピターは、死んだふりをしたり、あなをほるふりをしたりして出てこようとします。ジュピターは、僕たちと、一しょに学校に行きたいらしく、たまに僕がくつをはいていると、くつの近くによってきます。また朝食を僕たちと一しょに食べるのが大好きです。こんなジュピターが僕は、大好きです。

ジュピターに会えて、僕たち家族は、とてもうれしいです。いたずらもたく山したり、僕のことを大きな口ばしでかむこともあるけれど、ジュピターは僕たちの大切な家族です。

「わたしの家に遊びに来る動物たち」

W校　初等部三年　市坂　玲奈

わたしは今、アービントンに住んでいます。近くにはハドソン川が流れていて、わたしの家は少し高いところにたっているので、お天気のよい日は夕方、川の上にむらさきと青とピンクの夕やけがとてもきれいに見えます。家のまわりは林で、となりの家は少しはなれたところにあります。庭のおくが林になっているので、いろんな動物が遊びに来ます。

この家に引っこして一番さいしょにびっくりしたのは、しかが庭に来たことです。わたしは、しかが庭に来ると、いつもそうっと外に出て、『だるまさんがころんだ』をして遊びます。しかはわたしが動くと、草を食べるのをやめて、わたしの方をじっと見つめます。この時、わたしは決して動かないようにじっとしています。しばらくして、しかがまた草を食べはじめたら、すばやくしかに近づきます。こうして、五メートルくらいまで近づいたことがあります。いつか、もっと近くに行ってみたいです。

家のウッドデッキには色とりどりの鳥やりすが来ます。鳥のえさ台がおいてあるので、鳥はえさを食べにきて、りすはえさ台からこぼれたえさを食べにきます。一番面白いのは、しまりすです。しまりすは、ウッドデッキにこぼれたえさをそうじきのように、次から次へと口にすいこみます。顔の形がかわるくらい、ほっぺにたくさんのえさをほおばります。口の中がいっぱいになると、どこかに走って行ってしまいました。わたしはどこに行くのか知りたくて、しまりすの後からおいかけっこをしてみました。すると、庭のフェンスをくぐって、おとなりさんの庭の土の中にえさをうめに行ってしまいました。そしてしばらくすると、またウッドデッキにえさをすいこみにもどって来ました。とてもすばしっこくてかわいいので、わたしはしまりすが大すきです。

今の家に今年のはじめにひっこしてきてから、ほかにもスカンクやたぬきなどたくさんの動物に会いました。これからも新しい動物とたくさん遊びたいです。

「ぼくと読書」

W校　初等部三年　中村　泰

「読書にが手。読んでもらわないとやだ。読書大っきらい。」これがぼくの心の中の読書にたいしての気持ちでした。でも今はちがいます。アメリカにきてから、なぜか読書が大すきになっていました。そしてお母さんに聞いてみました。

「多分友だちが日本ではいたけど、アメリカではそんなにいないでしょ。だからひまになった時、ちょっと本を読んでそのうちおも白くなったからだと思うわよ。」

と言ってくれました。

日本の学校で、『もしも一回だけまほうが使えるなら』という題のプリントで「世界名作のどう話を全作買う」と書いていた子の気がしれなかったけど、今はよくわかります。今は読書が大っ嫌いな、かこの自分の気が知れないです。ぼくは読書の楽しさを、やっと知れたと思います。

ぼくは今、『ズッコケ三人組シリーズ』というシリーズの本に

はまっています。それは、すごくおも白い本です。せが小さいおっちょこちょいのハチベエ、知しきがあるけどせいせきがよくないハカセ、行動がスローモーのモーちゃん。その三人組のキャラが、まずおも白いと思います。そして、そのキャラだからこそ完成するストーリー。どの本でもおも白いとくちょうがある事が、本のいいところの一つだと思います。そして友だちがいないと、ひまになってさいごまで読めます。さいごまで読むとぜったいその本はおも白いです。

ぼくは、今自分で本を書いています。小せつ家になりたいからです。あんなにおも白い本をかけるなんてさい高です。書いた本は、ぼくみたいに読書が大っ嫌いで、ひっこして友だちがいなくて、ひまな子に読んでもらいたいです。

「リサイクル」

W校　初等部三年　山下　颯太

ぼくは、リサイクルがどんなにだいじかげんち校でならいました。

リサイクルはごみをへらして、日本みたいにわければいいと思います。けれどアメリカは、ほとんどの人がぜんぶのごみをごみばこにいれます。だから、リサイクルのことを習っています。

リサイクルする物としない物がのっているポスターを作りました。それを見てなにをリサイクルするかわかるように作りました。

ランチの時にリサイクルする物かしないか教えてくる人が一週間いてくれました。その時いがいは、教えてくれたことを思いだして、しています。それにカフェテリアのまどにリサイクルとごみの大きなポスターがはってあります。

ぼくは、リサイクルがだいじだと思ったから、家にある紙のいらないぶぶんをきりとりました。それをリサイクル用のはこにいれました。

今日の朝にリサイクルのことをお父さんに話しました。そうしたら、お父さんが「もしリサイクルしなかったら」のことを話してくれました。

「もしリサイクルしなかったら二つ悪いことがある。一つは、人も動物もさんそをすって、二さん化たんそをはく。そのはんたいで、植物は、二さん化たんそをすってさんそをはく。ごみしょり場でたくさんのごみをもやしたら、たくさん二さん化たんそがでて、地球上のさんそと二さん化たんそのバランスがとれなくなる。二つ目は、二さん化たんそが地球をかこんで、太陽が地球をてらしたら、そのねつで地球上の温度が高くなる。だから北きょくと南きょくがとけて、氷が水になって島を小さくしてしまう。」と教えてくれました。

もし日本とか、楽しかったアルーバがしずんだら、かなしくなります。

だから、ぼくはどんなにリサイクルが大切かわかりました。

これからみんな、ごみをへらしてリサイクルしてほしいです。

「秋のカナダりょ行」

W校　初等部三年　小宮　啓永

十月十二日から三ばく四日でカナダへりょ行に行きました。

まずニューヨークからひ行きでモントリオールまで行き、そこから車に乗って移動しました。さい初に見たのは、ノートルダム

大聖堂です。
中に入ったら、ステンドグラスがたくさんあっておしろのようにとてもきれいでした。お母さんと一緒に、キャンドルをともしておいのりしました。帰りにお父さんが大聖堂のたて物がほってあるキーホルダーを買ってくれて、うれしかったです。
それから、お昼すぎまでまちをさんさくしてケベックに向かいました。
車からはこう葉した町並のけ色が見えてきれいでした。ケベックに着いたのは夕方で、外に出るとひんやりした空気でした。夜ごはんまでホテルの周りの広場や、セント・ローレンス川を見わたせる公園などをさん歩しました。
夜は予やくしたお店でステーキを食べました。とてもジューシーでおいしかったです。ぼくはおなかがすいていたのでパンもおかわりしていっぱい食べました。そしてホテルでぐっすりねました。
次の日ケベックシティのまちをさんさくしました。石だたみの路地や石づくりのたて物がたくさんあってうつくしいまち並でした。ここは、じょうさい都市と言って、世かい文化いさんにも登録されていると、お父さんが教えてくれました。ぼくはいっぱい写真をとりました。
一番楽しかったことは、みんなでクレープやさんに行ったことです。ぼくが注文したのはいちごとアイスクリームが入ったクレープです。シロップをかけて食べたらあまくてとてもおいしかったです。
そして、今どはロレンシャン高原のモン・トランブランへ向かいました。車で四時間位かかったので少しつかれましたが、ホテルがとても広くてきれいでうれしかったです。
次の日は朝からホテルのプールであそんで、ごはんを食べてから出かけました。まずはゴンドラに乗って山ちょうまで行きました。ざんねんながら山のこう葉はもうおわりかけでしたが、山ちょうから見下ろすけ色はとてもゆう大でした。
ぼくは一番おもしろかったことは、山の上からゴーカートに乗っておりてきたことです。まずヘルメットをかぶって、リフトに乗り、上まで行って乗り方を教わりました。
レバーを上に引くとスピードが出て右や左にかたむけるとカーブを曲がることができます。お母さんは一番スピードを出してぐんぐん先へ行ってしまいました。ぼくはお父さんといっしょにゆっくりめにおりて行きました。楽しすぎて、ぼくとお母さんだけもう一回乗りに行きました。
今どはぼくも少しだけスピードを出してみました。風がとても気持ち良くて、何どでも乗りたいと思いました。お母さんもとても楽しんでいました。それから湖まで歩いてさん歩したり、お店で買い物をしたりして一日あそびました。この四日間、家族でいっぱい楽しい思い出ができました。これからもいろいろな所へりょ行に行ってみたいです。

「大切なもの」

L－校　初等部四年　高木　蓮奈

わたしには大切なものがいくつかあります。わたしの大切なものは家族、かっている金魚、クラスの友達、そしてアートです。
この中で一番大切なものは家族です。わたしはわたしの家族が大好きです。その理由は家族といると安心できて、楽しくて自然

でいられるからです。そして家族でいろんな所に出かけたり、いっしょにご飯を食べたり遊んだりする時が一番幸せです。

もし家族がいなかったらとても悲しいです。だからわたしにとって家族は大切です。そして家の家族でかっている金魚も大切なそんざいです。

名前はきょろちゃんです。きょろちゃんが家に来たのは今年の春です。

そのころはまだ小さくて三センチぐらいしかありませんでした。わたしは毎朝えさをあげています。きょろちゃんこれからも長生きしてね。

次に大切なものはクラスの友達です。三年生からずっと同じクラスでみんな仲よしです。このクラスメートはわたしにとってとても大切です。

いっしょに家で学校のプロジェクトをやったり、プレイデートをしたりずっと仲よくして来ました。もしお友達がいなかったら、学校はつまらないです。だからお友達も大切なそんざいです。

そして、最後に大切なものはアートです。わたしはアートが大好きです。その理由は絵をかいたり、色をぬったり、ものを作ったりして、自分を表げんすることができるからです。アートワークの時間は、とても楽しくていつも時間をわすれてしまうほどです。もしアートがなかったら毎日勉強や宿題ばかりでつまらないです。だからわたしにとってアートは大切なものです。

「持ちつ持たれつタリとタラ」

L－校　初等部四年　フシロ　タラ

「あ、タリだ！」

また変なことをしている。

私の親友のタリは、ロシア系アメリカ人です。えんぴつみたいに体が細くて背が高いです。ようちえんからずうっといっしょに遊んできました。とてもやさしい子で、家で遊んでいる時は、ふつうの十才の女の子みたいにふるまっています。でも、学校に行くと変なことをするので、男の子たちはタリのことが好きじゃないのです。

タリはよく変なことを言います。

ある日、タリが急に、

「私、手あらいでパンツをぬいでみんなにおしりを見せるよ。」

と言いました。私は何も言わなかったけれども、内心びっくりしました。私は実際には、タリがおしりを見せたところを目げきしなかったけれど、きっとタリのおしりを見たこどもたちは、変な子だと思ったでしょう。

他の例をあげます。タリは、うれしい時に、「パピーダンス」というおどりをします。パピーダンスというのは、子犬みたいにむねの前に、両手をもってきて、ほっぺたをつり上げるように、笑った顔をしてぴょんぴょんとジャンプすることです。男の子たちは、それを見ると、いつもタリのことが変と思って笑います。

どうしてタリは、変なことをするのだろうと考えてみました。タリはもしかしたら、みんなを笑わすと、みんなが、タリのことを好きになってくれると思っているかもしれません。でも現実には、タリの計画はうまくいきません。

去年の冬のことです。タリが雪のブーツを体育館のベンチに、おいておきました。そしたら、ブレッドという男の子が、タリのブーツに水を入れたのです。私はそれを見て、かっとなって、

「なんでそんなことするのよ。」

とどなりました。でもブレッドは、

「フン」

と言って、さっていきました。そこへタリがやってきて、びしょびしょになったブーツを見て、なきそうな顔をしました。私はタリに、

「心配しないで、だいじょうぶだよ。ブレッドはふざけているだけ。」

と言って、タリをなぐさめました。タリは安心しました。

そんなタリですが、タリが私のことを助けてくれることもあります。私がテストで、よくできなかった時、タリが、

「だいじょうぶ、私もよくできなかったよ。」

と言ってくれました。そのことを、母に話したら、

「持ちつ持たれつの仲だね。」

と言いました。タリは変わったことをして、人に笑われたり、いたずらをされたりするけど、タリといっしょにいると、楽しくて安心します。にていないけどにているところがあるのかな。タリとタラはなかよしなんです。

「ぼくの周（あまね）」

L一校　初等部四年　大日方　柊

周は、とってもかわいくて、まるまる、ぽちゃぽちゃしています。足は、チキンドラムスティックみたいに太くて、おいしそうです。手は、ピンポンボールぐらい小さいです。みんなは、ぼくと周は、そっくりと言います。これがぼくの弟、周です。

周は今、六か月で、ねん返りをしたり、ハイハイをして遊びます。人が近くにねっころがっていると、うれしそうにかみの毛をつかんで引っぱります。たまに、ハイハイしてピアノのいすの下にもぐりこんだり、スポンジマットの角をかみかみしています。周を一人にすると、泣き始めます。朝だけは、元気があるせいか、ほっといても泣きません。ぼくが、変な動きをしたり、面白い顔をすると、ギャハギャハ笑います。ぼくは、そんな周がかわいいと思います。

周が生まれた時は、三月でまだ寒かったです。周は、六パウンドで生まれて、今にくらべると、とってもとっても小さかったです。落としてしまいそうな気がして、だっこするのがこわかったです。でも、何回もやっているうちになれてきて、こわくなくなってきました。ぼくは、周にミルクをあげたりおむつをかえてあげたりしました。それから、ぼくは色々とお手伝いをしたり、周のまわりを歩きながら歌ったりおどったりして遊んであげました。今では、お母さんが、

「周をお風呂に入れるよ。」

と言うと、ぼくは洋服をぬがせてあげたり、ベビーバスを用意してあげられるようになりました。

実は、ぼくは九年間一人っ子でその間弟がずっとほしかったです。そこにやっと周が生まれてきてくれました。周は生まれてからは、みんなが周に注目してもぼくはやきもちをやきませんでした。なぜかというと、ぼくも周はかわいかったし、ぼくの物をほめられているようでうれしかったからです。

ぼくが十八才の時、周は今のぼくと同じ九才になります。どんな弟に育っているか楽しみです。その時にはぼくは、周に勉強とピアノを教えてあげたいです。もし、周がはんこうしたら、「おれがおまえのおむつかえてやって、だっこもしてやったんだぞ。だから言うことをきけ。」と言おうかな。

「おつかい」

W校　初等部四年　那須　咲代

絶対に私がしたい事。それは来年の夏一人で先に日本へ行く事だ。家族はまだ無理だと思っているようだが、私は絶対出来ると信じている。それは、今年の夏のある経験が私に大きな自信をあたえてくれたからだ。

日本の祖父母の家に泊まっていたある日、私が一人でおつかいに行ってみたかった事を知っていらした祖母が「咲代ちゃん、お買い物に行ってくれない。」と声をかけて下さった。

行き先は歩いて五分以内のスーパー。それでも私は本当に嬉しかったので、ワクワクドキドキして飛び上がって「うん。」と返事をした。買う物はきゅうり三本と大きなトマト一個。祖母は「書かなくてもおぼえていられるでしょう。」とおっしゃったが、私は頼まれ物を絶対に忘れたくなかったので念のためリストを作った。私は、預かった五百円玉を財布にしっかり入れ、張り切って出かけた。

私は階だんをかけ下りウキウキしながら店へスキップした。横断歩道では、きちんと日本式に「右、左、右」と見て安全に気をつけて渡った。せっかく一人でおつかいに行かれても、けがをしてしまったら、もう二度と行かせてもらえないかもしれない。店に着くと私は、「これから一人で買い物だ。」と喜んだ。でも嬉しすぎて一体何を買うはずだったか忘れてしまった。「どうしよう。」リストを見つけ「ああ、よかった。」と私はホッとした。

私はまず店全体を見回した。でも、きゅうりもトマトも見当たらない。やっときゅうりらしき物を見つけて、そのパックを一つ手に取った。でも、パックには、「ズッキーニ」のラベル。不安になった私は急いで店の人にきゅうりの置いてある場所をきいた。店の人に何度もお礼を言い、私はそこに足を運んだ。ついに見つけた一パック三本のきゅうりをかごに入れながら、私は「トマトは自分一人で見つけるぞ。」と決心した。店をぐるっと見回すと「トマト」と書いてある札が遠くに見えた。急いで行ってみると、それはミニトマトだった。私はがっかりしたが、再度トライ。ついに「赤い物体」発見。かけよってみると、大きなトマトだった。「やった。」と私は笑顔になった。その大きな一個のトマトをメダルのように手にしっかり持ったまま、私はまるでオリンピックで勝ったような気分でレジの列にならんだ。

帰り道、私の心は「一人で買い物が出来た。」と大変満足していた。日本に住む多くの人は、十才の私が初めておつかいに行かれた事をほこりに思うなんて赤ちゃんぽいと考えるかもしれない。でも、アメリカ育ちの私にとってこの経験は大切な第一歩だ。「自分はやった事がないから」を理由に出来ないのではなく、逆にだからこそ一人でやってみる事が大切だと思う。

このおつかいがきっかけとなり、私は「どんなむずかしい事でも一人で出来る。」と思えるようになった。その後、私はラッシ

ュ時に一人で電車を二回乗りかえて帰ってくる事も出来た。だから「来年の夏、きっと一人で先に日本へ行ける。」私はそう信じている。

「アメリカと日本のちがい」

W校　初等部四年　根本　凌太朗

アメリカと日本の一番のちがいは物の大きさだと思う。なぜならアメリカは家やビルが日本とくらべ、やや大きいし飲料水もほとんど大きいのが多い。

そしてアメリカのいいところは、とても体の不自由な人のためのせつびが多いところだ。例えば学校の中に点字があったり、ドアに「危険」と点字があったり、車いすがスーパーや公共の施設などにあったりする。

そして、ぼくにとってアメリカの特色は、都会にも緑の多いところに住めることだ。自然を味わいたければ、緑の多いところへ行けるし、コンピューターなどがほしければ都会へ行ける。少し遠いが便利だと言える。

反対にアメリカの悪いところは、現地校にゲームを持って来てゲームをやっているのだ。これでは、遊んでばかりで勉強ができなくなってしまう。さらにゲップしても何にも言わない人がいるのだ。これはひどいと思う。ふつうは、

「ごめんなさい。」とか、「失礼しました。」など言うはずなのに、した本人が何事もなかったかの様に、何も言わないのだ。もちろんみんながそういうわけではない。

もう一つは、飲料水のバランスだ。例えば、牛にゅうなどが大きすぎてくさってしまうことがある。これでは、お金が少し無駄になってしまう。

あと、油ものが多いのが食料の最大の欠点だろう。これでは、太るのは当然だが、胃が下水道の様にきたなくなって、やがては胃がとけ始め、最悪の場合死んでしまうかもしれない。おいしいのは分かるが、食べすぎは注意だ。

一方、日本は家やビルがやや小さめで、車の大きさもアメリカほどではない。

日本の悪いところは、家がせますぎるところだ。せまいスペースに四、五人の人がいたら、空気は悪くなるし、いらいらするからストレスがたまってくる。

そして、日本のいいところは、なんといっても温せんだろう。外国には、めったに温せんなどない。かりにあったとしても、日本ほどすばらしいものはない。また、すしも日本どくとくのものだ。

ぼくは、アメリカより日本の方が好みだ。なぜかというとアメリカはどくとくの物が少ないからだ。

しかし中には、アメリカが好きな人もいるかもしれない。やはり人は、自分の生まれた国が一番好きなのだろう。

「わたしのゆめ」

W校　初等部四年　原口　華那

わたしはゆめを二つ持っています。

一つ目のゆめは、アナウンサーになる事です。紅白歌合戦の司会をしてみたいです。紅白歌合戦は日本人の多くの人々が見る番組だからです。

二年生の時、お楽しみ会で司会をやりました。やる前は少しき

んちょうしたけど、やり始めるとあっという間に終わってしまいました。しかも、とても楽しかったので、またやりたいなと思いました。

わたしが好きなアナウンサーは、ひろせアナウンサーです。わたしのお父さんの友達で、よくいっしょに仕事をしているみたいです。だから、たまにひろせアナウンサーに会います。とてもかわいかったです。アナウンサーは、顔がかわいい人ばかりだなと思いました。

わたしがいつも

「アナウンサーになれるかな。」

と言っていると、母は

「ゆめを持っている事がすごいよ。」と言ってくれます。もし、わたしがアナウンサーになったら、家族や友達や知り合いに見てもらいたいです。

わたしは、アナウンサーになるために今できる事は何だろうと考えました。いつもほ習校ででる音読の宿題を一生けん命にやる事がアナウンサーになるための第一歩かもと思いました。アナウンサーは、聞いている人たちに分かりやすく伝えなければならないからです。だから、音読を毎日やろうと思いました。

二つ目のゆめは、子どもをうむことです。女の子が二人ほしいです。わたしは妹がいてよかったと思うからです。わたしの母も、女の子が二人ほしかったそうです。でも父は、男の子がほしかったそうです。父は男だからだと思います。女の子が二人いたら、すぐ話し合えるからいいと思いました。五体満足でうまれてきてほしいです。わたしの母は、

「男の兄弟しかいないから、女の子の姉妹がうらやましいな。」

と言っていました。わたしも、母の気持ちがなんとなく分かります。それから、

「赤ちゃんをうむ時ってすごくいたいよ。」

と言っていたのでわたしは赤ちゃんをうむのがこわくなりました。でも、

「大じょうぶだよ。ママもうめたんだから。はなにもできる。それに赤ちゃんをうむよろこびのほうが何十倍も大きいんだよ。」

と言っていました。わたしは、ぜったいけっこんしてかわいい子どもを二人うみたいです。

「僕のにわとりたち」

W校　初等部四年　林　連太郎

今日もにわとりと共に一日が始まった。にわとり小屋を開けるのは、僕の仕事だ。でもだいたいいつも、僕が起きだす前に父が開ける。

「もっと早く起きなさい！。」

と、父は言うけれど、にわとりのようには起きられない。

にわとりの良いところは、何と言っても新鮮なたまごだ。産みたての温かいたまごは、まるで小さな宝箱。箱を開けると黄金の玉。黄金ってごはんにかけるとこんなにおいしいんだね。にわとりさん、ありがとう！

この世界はにわとりにとって、危険がいっぱいだ。キツネやラクーンにおそわれて、今年も三羽が死んだ。家族の一員を失ったようで、本当に悲しい。早死にした三人の妹(姉)たち。天国で待っててね。

囲いから飛び出さないように、いやがる彼女たちの羽根にハサミを入れた。ごめんね。でも、迷い出て命を失うよりは、羽根を失う方がましだと父は言っていた。僕もそう思う。また春になれば、新しい羽根が生えてくるからね。（そうしたら、また切るけどね。ごめんね。）

「波の上で」

L－校　初等部五年　吉田　禅

波の上を見つめていた。遠く向こうに高くて白い波が見える。その波の上に人かげがあった。ぼくはつぶやいた。

「サーフィンしている人たちだ。」

ぼくには格好よく見えて、感動した。

ぼくは別にハワイに来てサーフィンをしたいと思っていなかった。ハワイにはその前に二回来たことがあったが、サーフィンをしたいとは頭に一度もよぎらなかった。ホテルのプールにあるスタンドで「サーフィンレッスン九十ドル」と書いてあるポスターがはってあった。父が、

「サーフィンやってみる。」

と聞いた。妹はすぐ

「いやだ。」

と答えた。でも、ぼくは、急にちょう戦したい気持ちになり、

「やる。」

と言った。

サーフィンレッスンの日が来た。アメリカ人の高校生らしい男二人組も参加していた。砂浜で待っていると、コーチがやってきた。かれは二十代のトースターで焼けたパンのようにこんがり日焼けし、力がありそうなハワイの人だった。やがて、レッスンが始まった。

最初は砂浜の上でコーチがサーフボードで立ち上がり方や立ち方を教えてくれた。楽しそうで早く波に乗ってみたいと、気持ちがはやった。そのあと、自分のサーフボードを持って、海に入った。海はステンドグラスのようにとう明でかがやいていた。

「遠い向こうまでこいでごらん。」

と、コーチが言った。ぼくは言われた通り、ボードに腹ばいになってうでを大きく回してこいだ。最初は、思った以上に速く進めたが、だんだんつらくなり目標の半ばですでにうではちきれそうでクラクラするほどだった。最後は、となりでこいでいたコーチが足でぼくのサーフボードを引っ張ってくれた。ついに大きなブイに着いた。ふり向くと、砂浜ははるか向こうに見えて、自分でこんなに遠く行ったことはなかった。ワクワクした。

そのブイにはロープがつながっていて、そこにつかまって順番を待った。番がくると、コーチが波がある所まで引っ張ってくれた。そこまで来ると、波が一・五メートルくらいあり、サーフィンにちょうどよい状態だった。ドキドキした。いい波が来たとき、コーチがぼくのボードを手で力いっぱいおしてくれて、波をすべるように乗っていた。次は立つ。とてもきん張した。むねがいたくなるほどだった。やっぱり一回目は失敗した。立とうとしても、石みたいに体がカチコチでボードがゆれてひっくり返ってしまった。次はうまく立てた。高校生たちよりも早く立ててミラクルみたいだった。波の上をすべっていた時は鳥になった気持ちだった。波に乗ると車みたいにガダガタしなかった。ものすごくスムーズにすべって楽しかった。海の王様のような気持ちになった。

波の上でぼくは新しいことを体験して、自分が大きくなった気がした。何度も波に向かった。コーチともひと言も話さず、夢中になって練習した。たっぷり練習できてよかった。レッスンが終わったら、すごくじゅう実した気持ちだった。また来年もハワイに行けたらサーフィンをしたいと思う。

「ぼくの初めての犬」

W校　初等部五年　パルミエリ　ケイシー

去年の十一月のことでした。その日はハリケーンサンディーで、停電六日目でした。空は晴れていましたが、寒い日でした。父は仕事でいませんでしたが、突然、ドアから入ってきました。手にはダンボールの箱を持っていました。ぼく達はなんだろうと思いました。父はぼく達の顔を見てにこにこしています。それを見てぼくは、

「もしかして犬かもしれない。」

と思いました。なぜかと言うと、前から父がぼくと弟に犬をもらってくる話をしたことがあるからです。ぼくはそういう話を思い出しました。ぼくの思ったことが当たっていました。父が見せてくれた箱の中には小さいふわふわの子犬がいました。ぼくはうれしくて犬をだっこしました。本当に小さくて、とてもかわいい犬でした。子犬はトイプードルで、丸くて黒い目と細いしっぽに砂のようなきれいな色をしていました。ぼく達は、ハリケーンサンディーの時に来た砂色の犬にサンディーという名前をつけました。サンディーとぼくはいつも一緒に遊んだり、一緒に散歩したり、一緒にねます。サンディーはぼくのいうことを良く聞きます。だからぼくもサンディーのことを一生けん命世話をします。

ぼくはサンディーのことを素晴らしい犬だと思います。ぼくは悲しい時やつらい時はサンディーの所に行きます。そうするとサンディーはずっとぼくのそばにいてくれます。ぼくはほっとして悲しい気持ちがなくなります。一月に家族全員が病気になった時もさわがないで、ずっと静かにしてぼく達のそばにいました。みんな病気なのを分かっているようでした。そしてなによりもすごいことは、ハリケーンサンディーの時に、ぼくの家はずっと停電で水も電気もありませんでした。でも、サンディーが来たすぐに電気がもどってきたのです。これには、家族全員がとてもおどろきました。父が

「サンディーは、幸せと希望を持ってくる犬だよ。」

と言いました。ぼくは本当にそうだと思いました。

サンディーはぼくの初めての犬です。ぼくの家に来てとても良かったと思います。これからもずっとサンディーと一緒にいたいです。

「カリフォルニア州への旅」

W校　初等部五年　立本　浩大

ぼくは八月の終わりから九月の始めに家族みんなでカリフォルニアに行きました。一週間だけでしたが、色々な事をして、ぼくの中では今までで一番楽しかった旅でした。四つの場所に行って、とても楽しかった場所は二つあります。一つ目はヨセミテ国立公園で、もう一つはサンフランシスコです。

九月二日から五日までいたヨセミテ国立公園は、この旅のメインの場所でした。ヨセミテで楽しかった事は、二つあります。一つ目は、トラムに乗ってマリポサグローブという森林を見学した

ことです。セコイアの木や、ヨセミテの歴史について、いろいろ学べました。また、すごい木なども多数ありました。火事の時、燃えた木がせんたくばさみのような形に穴がなった木や、人が入れるほどの大きな穴の木や、木の中で上を見上げると太陽の光が木の天井にある木など、様々なユニークな木があって、楽しかったです。ヨセミテでもう一つ楽しかったのは、サイクリングです。最初は少し難しかったけど、だんだんこぎやすくなり、半分ぐらい進むと、父と五百メートル程の差ができました。木がおいしげったすずしい道をハイスピードで走っているのは、とても楽しかったです。ヨセミテは三日じゃとても全て見れなかったので、また行きたいです。今度は、大人になって、ハイキングなどをしてみたいです。

もう一か所楽しかった所は、最後の三日間いたサンフランシスコです。ここで楽しかったのは、サイクリングと、野球観戦です。サンフランシスコでも、サイクリングをしました。ここでは、ゴールデンゲイトブリッジを中心にした、約十五キロのサイクリングでした。途中、坂道がいくつかあり、自転車から下りて、押さなければいけない場面もあったので、そこはきつかったです。でもその分、下り坂と、帰りのフェリーは、風が気持ち良かったです。今度また、サイクリングをしたいです。もう一つ楽しかった事は、野球観戦です。ぼくはこれが楽しみで楽しみでしかたがありませんでした。そして、この試合が、ぼくの心に一生残る試合でした。サンフランシスコのチームは、サンフランシスコ・ジャイアンツという強いチームです。球場は、右側が海で、場外ホームランを右側に打つと、球が海に落ちて、その球を取ろうとするファン達もいる面白い球場です。選手の名が入っているTシャツを買い、売店で食物を買い、ついに試合が始まりました。ぼくと父の席は、ホームプレートの少し左のとても良い席でした。父が、

「ヤンキースタジアムだと八百ドルぐらいだろうなあ。」

と言っていて、おどろきました。試合を見ている内に、ジャイアンツの投手、ピティットが、五回を終え、一本もヒットを打たれてないことに気づいたのです。ファンもそれに気づいてきたのでしょう。六回、ライナーボールがあさい左方面に飛んできました！ここで取らなければ完全試合（投手が一本もヒットを打たれないまま試合に勝つこと）は終わりです。その時、レフトがスライディングに成功しました。

「ワァァァーーーーーー！！！！！」

観客はそう立ちです。そのまま九回へ。点は0対三。勝つのはわかっています。ピティットは、九回表二死まで行きました。客はもうれつに声をあげています。敵は代打を使ってきます。一球目はボール。ストライク、ボール、ストライク、ボール。六球目。九回表、二死、フルカウント。あと一つアウトを取れば、完全試合です。ド真ん中のストレート。カキーン！ボトッ。

「アァァーー」

観客はため息をつき、投手は手に頭を置き、ライトがワンバンで取った、完全試合をなくしたボールを手にとりました。一分後。試合終了。0対三。ジャイアンツの勝ち。インタビューの後、ホテルにもどっている時、十一時の暗い街の中、ぼくは父としゃべっていました。

「めちゃくちゃおしかったね。」

「そうだな。でもあの投手はすごかったな。この試合を見られて良かったな。」

などの会話をしながら、ぼくはこう思っていました。ぼくももっと野球をがんばるぞ。そしていつかプロになるぞ。さらにオールスターになってワールドシリーズで勝つんだ！

これがこの旅の思い出です。この一週間は、ぼくの一生の思い出になると思います。大人になったら、ヨセミテやサンフランシスコにまた行きたいです。カリフォルニアの楽しさを十分に満きつできた一週間でした。

「宇宙にたった一つしかない地球」

L－校　初等部六年　笠井　勇汰

「ドッカーン。」原子爆弾が広島に投下された。八月六日世界は嘆き悲しみ、驚いた。世界はその時、原子爆弾の恐ろしさを実感した。けれども今日まで原子爆弾や核兵器の実験により何度もそれらが爆発し世界を痛めてきた。補習校でも学んだが、戦争を起こさないで、平和がほしいという人がたくさんいるのに、今でもまだバカげた戦争や争いをしている国はたくさんある。僕自身でも愚かな戦争をやめたほうが絶対いいと思っている。一方で、歴史上でも命を懸けて戦争を止めようとした人たちもいた。けれども争いを止めることはできなかった。争いをこの世から無くすことはとても難しい。たとえば世界のどこかで何時もけんかや殴り合いが起こっているからだ。僕はけんかや争いを止めるには、みんなが少しずつ我慢して人の言うことを受け入れることだと思う。例えば、僕が考えた一番いい方法は、すべての人たちが自分の国や文化の事だけ考えるのでなく、地球人として皆で一つになって、この宇宙に一つしかない地球を大事にすればよいのだと思う。またその合言葉は、ワンファミリー。

話が変わって、この前ニューヨーク国立自然博物館に行った。そこで僕は世界の動物が絶滅危機で住むところがなくなってきているということがよくわかった。例えば、動物の王者ライオン、象、アメリカバイソンなど、今では極端に数が減少してきてしまっている。このままでいくと、三十年後の未来の子供たちは生きたライオンを見ることが出来なくなってしまうかもしれない。結果的に悪者、世界を破壊している生き物は人間ではないか？木を伐り、海を汚し、排気ガスやメタンガスそれと二酸化炭素を増やし、きれいな空気を減らしている。また前にも言ったが、それよりももっと憎たらしい戦争が起きると一瞬で世界は滅びてしまう。そして、すでにオゾン層までも壊してしまった。今では、地球上は人間のせいでぼろぼろになってしまっている。この地球は人間だけのものではなく、鳥や魚や木々やすべての生き物のためにあるはずだ。

たった一発の原子爆弾で、どれだけ地球を痛めつけてしまうのか？大人たちは考えているのだろうか？もしそこに、爆弾を落とす人の大切な人たちが暮らしていたとしても同じように爆弾を投下できるのだろうか？人間はわがままだ。このままいくと自分が大人になった時にはいったいどんな地球になってしまうのだろうか？今僕にでできることは何だろう？僕は一生けん命僕なりに考えてみた。

そしてやっと思いついた！それは、「ペットボトル・コンペティション」と言って、一番ペットボトルやプラスチックの物を集めた人が勝つというイベントだ。なぜこのようなことを考えたかというと、以前読んだ本の中に書いてあったのだが、太平洋の真ん中には、日本より大きな島みたいなものが浮かんでいる、それ

はすべてゴミだ。ゴミの島なのだ。プラスチックを魚が食べると人間にも影響し、生き物は死んでしまうかもしれない。その魚を食べる小さな鳥、その鳥を食べる大きな鳥まで死ぬ可能性がある。この地球の生態系が崩れてきてしまっているのだ。だから僕はこのコンペティション(ゴミ集め)が必要であると思った。例えば、賞金は一億円でホームレスや貧乏な人、裕福な人、皆がリサイクルのために頑張ればいいなと思う。賞金がつくと人間やる気が出ると考えた。このようなイベントは今すぐに始めなければいけないと思う。ルールはポリ袋に、ペットボトルやカンなどをそれぞれの袋に詰め毎月まちを政府から要請された人がそれぞれの重さを量る。たくさん集めた人は、その量に見合う点をもらえる。年の最後に点を足してその点が一番多かった人に賞金が渡されるのはどうだろう。僕はこの方法で世界中がきれいになれたらいいな、と思う。

今僕にできることは限られたほんの小さなことかもしれない、でもみんながそのほんの小さなことを今はじめなければ地球は救えないと思う。今からみんながんばりこの地球を救う方法を考え、全力を尽くしたらよいのだと思う。きっと誰かがやってくれるという心は甘い。そのような考えでは本当に地球が死んでしまう。だから僕は大きくなって地球を救えるような人になりたい。例えば地球温暖化や戦争、核兵器を止める人になりたい!でないと宇宙にたった一つしかない地球は滅びるだろう、本当に滅びるだろう!

「運動会」

W校　初等部六年　三井　大輝

今年は小学校最後の運動会でした。僕は幼児部から補習校に通っているのでこれが七回目でした。低学年の頃は出番が少ないために待ち時間が多くて運動会がとても長く感じましたが、今回は六年生で出番が一杯あったので、一番短く感じた運動会でした。僕は開会式で赤組代表として白組の三橋健人君と選手宣誓をしました。当日は緊張するのではないかと心配していましたが、大丈夫でした。学校全体でラジオ体操をした後、競技が始まりました。六年生は「一致団結全員集合」、徒競走とリレーに参加しましたが、何と言ってもハイライトは応援合戦でした。学ランを着た応援団長が赤、白、それぞれのチームの前に立ち、号令をかけました。僕のクラスは保山健人君の「勝つぞ、勝つぞ、赤組勝つぞ。優勝、優勝、赤組優勝」という言葉に合わせて三、三、七拍子をした後、六年生全員で組体操をしました。僕はピラミッドの一番下でしたが、先生の笛の音に合わせて組んだり、つぶれたり、また組んだりするのがとても楽しかったです。考えてみれば、僕も大分身体が大きく、強くなりました。今は母より十センチ背が高くなり、気管も太くなりましたが、低学年の頃は小児ぜんそくの為、砂ぼこりが多い競技が行われている間は、自分のテントから離れて母と運動場の端で待っていたのを覚えています。もちろん運動会が始まる前と途中で吸入するのですが、それでもある年は運動会の帰り道に咳の発作が起きた事もありました。それなのに、今年はピラミッドの一番下で埃を吸っても苦しくならずに最後まで元気で参加する事ができました。皆と思いっきり走り、「一致団結」の五人六脚の競技や綱引きに参加できた事を嬉しく思い

ました。おまけに赤組が勝って最高でした。初めは雨に降られた運動会でしたが、中止にならずに本当に良かったです。とても楽しい最後の運動会でした。

「九・一一メモリアルに行って」

W校　初等部六年　山本　琉晟

僕は、十月六日日曜日に家族と一緒に九・一一メモリアルに行きました。九・一一メモリアルとは二〇〇一年九月十一日に起きたテロにより、破壊されたツインタワーの跡地にできた、犠牲者を追悼する場所です。

ツインタワーの跡地にはそれぞれ二つのプールがあり、九メートルもの滝が流れ落ちています。プールの周りには青銅の胸壁があり、そこに犠牲者の名前が沢山刻まれていました。テロ攻撃による犠牲者は約三〇〇〇人でした。

テロが起きた時、まだ僕は生まれていませんでした。当時のことを両親が話してくれました。その頃、両親はアメリカに住んでいて、事件を知ってとてもショックを受けて、最初は信じられませんでした。二か月前そのツインタワーを訪れたばかりでした。父は大学院に通っていましたが、翌日から、テロに屈しない意思表示のためにみんな、赤や青の服を着て学校に行ったそうです。赤と青は星条旗の色です。あんなにひどいテロにあってもおそれることなく立ち向かおうとする態度は立派だと思いました。

青銅に刻まれた犠牲者の名前を見ながら、一人一人にそれぞれ家族や友人がいるんだ思うと悲しい気持ちになりました。特に、日本人の方の名前を見つけた時は同じ日本人として悔しかったです。テロは何の罪もない人の命をうばうので許せないです。

今では九・一一メモリアルの敷地内には沢山の木が植えてあり、とても平和な感じがしました。しかも、すぐ近くに新しいワールドトレードセンターが建築中で、すでにすごい高さになっていました。たった十年でここまで復興したのを見てやっぱりアメリカはすごいなと思いました。

「忘れられない瞬間」

W校　初等部六年　北出　航太朗

生まれたばかりの赤ちゃんは衝撃的だ。小さくてしわしわの皮ふに、くちゃくちゃの顔。小さな口から出るオギャーと泣く声は病室中に響く。初めて弟を見た僕は弟が不思議でしかたなかった。

弟が生まれたのは僕が小学一年生の時。「もうすぐ生まれるぞ」と父が学校に迎えに来てくれた。病院につくと、母がベッドで苦しそうにしている。待ちきれなかった。もう少しで弟に会えるのだ。けれど弟が生まれてくるのは思ったよりも、時間がかかった。本当に生まれてくるのか心配で様々な考えが頭の中をグルグルと回った。「大丈夫なのだろうか。」「どうやって人間は生まれてくるのだろう。」「自分の入っていたお腹に自分の弟が入っているなんて変な感じ。」

本当は弟が生まれてくるのを見るのが怖かった。なぜかはわからない。母が痛がっていることや初めて見る誕生の瞬間だったからかもしれない。

弟が生まれた瞬間、血が周りについていて母も弟も痛くないか心配になった。弟はとても甲高い声で泣いた。マンガで見たように本当にオギャーと泣いた。僕はお医者さんに特別にへその緒を切らせてもらった。へその緒は赤ちゃんが栄養分をとるためにお

母さんとつながっている管のことだ。ぬるぬるして切りにくかった。気持ちが悪いというか不思議な感じだった。へその緒は体とつながっているのに切っても痛くないからだ。怖いという気持ちはもう消えていた。

弟は一日一日変化し、成長している。最初は寝てばかりだったのに、今は一緒に話したり笑ったりできて毎日楽しい。弟が生まれた瞬間に立ちあえたのは、かけがえのない経験だ。弟は僕にとってかけがえのない存在だ。

「技術の未来」

L－校　中等部一年　平形 将都

ぼくは、「理数系」といわれている。だからなのか、ぼくはコンピューターやそういう技術などに関わることに、ものすごい興味を持っている。加来道夫などの本も読んでいる。将来は、そんな技術にまつわる仕事をしたいと考えている。

ある日、「三十年後の未来はどうなっているだろう?」と問われた。一番最初に頭に飛び込んできたのがロボットだった。例えば、災害時に使われるロボットとか、つきの表面を移動するロボットなどだ。重い荷物をどんな地形でも運べるロボットや、勝手に運転してくれる車のロボットが、次々に開発されている。だから、いつもロボットのニュースを見ると目が釘付けになってしまう。

そして、また、ある時、ＮＨＫの放送で介護ロボットが活躍するのを見た。これを見た父が、苦笑いをして、「これから、これでいっぱい金を稼ぐ奴らがでてくるんだろうなあ。」と言った。ぼくは、そのときは首をかしげた。しかし、そのうちに父が言ったことが分かってくるようになった。日本は、少子高齢化である。だから、高齢の人が増えて、人手が足りなくなり、ロボットに頼るしかなくなるだろうとぼくは思ったのだ。だが、これも科学の進歩であると感じる。

「介護ロボット」といっても、いろいろな種類がある。認知症の患者を観察し、ベッドから起き上がったときに職員に警報を鳴らすロボットから、寝たきりのお年寄りを運んでくれるロボットなどだ。どれも与えられた仕事には、十分に適用するが、プログラムされた機能以外の仕事はほとんどできない。例えば、認知症の患者を見ているロボットでも、押しのけられたらそれでおしまいだ。立ち上がって追いかけるのはまず、不可能。悲しいことに、今はゴキブリのほうが、ロボットよりずっと頭がいいのである。

だが、これから科学はもっともっと進歩してゆき、ロボットのコンピューターは今よりずっと進化しているだろうと期待できる。なぜなら、今、ぼくたちは「革命の時代」に生きているからだ。市販のコンピューターやタブレット端末は短い間にこれだけ進化した。最近の「歌うバースディーカード」ですら、第二次世界大戦の連合国の技術をはるかに超えているのである。だから、未来にどんなすごい機能を持ったロボットが開発されるかと想像するとわくわくする。飛べるロボット? それとも退屈なときに一緒に遊んでくれるロボット? きっとどこかにこんなロボットを作ろうとしている人は必ずいるはずだ。

コンピューターとくると、もう一つ、思いつくものがある。それは、スーパーコンピューターだ。スーパーコンピューターは、円周率などの計算をすごいスピードで行う。コンピューターチップが更に小さくなっていく中で、スーパーコンピューターも

のすごい進歩を遂げている。ディープブルー、富士ツーK、クレータータンなどが現存し、今、世界で一番計算が速いのは、中国のチアンヘー2である。千兆の計を意味するペタフロップを一秒に三十三点八十六回こなすことができる。ここから更に進化してゆくのか？　ぼくは、わくわくしている。

　これから、世界はどうなっていくのだろうか。ロボットが世界を支配するまでには、当分ならないだろうが、人間と会話できるなど、いろいろ進化してゆくだろう。次は何がでてくるのか？知らないうちに身の周りの物にもコンピューターが搭載されるようになるかもしれない。もしかしたら、ぼくが、画期的なコンピューターやロボットを開発するかもしれない。

「別の世界」

L－校　中等部一年　吉藤 杏菜

　アメリカの生活とくらし方は、他の国とはまったく違います。例えば、タイに行ったら、最も優先されるのは王さまです。アメリカの場合は、財政援助をあまりしていないのかもしれません。タイの政府はアメリカと違って、財政援助をあまりしていないのかもしれません。だから、まずしい人がたくさんいるのでしょう。

　タイに旅行した時のこと、それは、タイのマーケットに行ったときです。そこに変な人がいました。その人は色々な種類の味のピーナッツをプラスチックに入れて売っていました。

「ピーナッツ買わない？」

と言われて、私たちは手を横にふり、「いらない」というジェスチャーをしました。しかし、その人は追いかけてきました。

「ピーナッツ、買わない？いろんな種類があるよ。」

とまた言いました。今度は、私たちは、

「いりません。」

とはっきり言いました。でも三回目にまた来て言いました。

「ピーナッツ、買わない？」

なんでこんなに、何回もくるのかと私は思いました。きっとこのピーナッツに、生活がかかっていたからなのでしょう。

　私はアメリカで、ヘアピンとかネールポリッシュを買うのに二十ドルくらい使います。自分がいかに恵まれているかが分かりました。そして、そのときに両親に「ありがとう。」と言いたい気持ちになりました。アメリカは、一生懸命に働けば、何かにたどりつける国です。「あきらめずに頑張ればアメリカンドリームをつかめる。」とよくいいます。でもタイでは、一生懸命に働いても、一生懸命、ピーナッツを売っても、成功できないかもしれません。これは、アメリカとタイの大きな違いだと感じました。

　タイでは、王さまが一番偉いと言いました。どこに言っても、王さまの絵か、写真があります。タクシーに乗ったら、バックミラーに王さまの写真がおいてありました。カフェにも王さまの絵がありました。王さまのお誕生日を祝う美術館には、高価なゴールドで作った乗り物や飾り物がたくさんありました。この美術館を作るには、すごく、時間もお金もかかったでしょう。なぜ、このように王さまの誕生日を祝うだけのために美術館を作ったのか？とても不思議に思いました。ほかに大切なことは、もっと沢山あるのに。貧乏な人や町を助けるとか、です。でも、みんなの時間と努力は王さまにフォーカスされています。アメリカでは自分が本当に好きなことや、面白いと思うことに集中できます。政府を尊敬する人はあまり見かけません。しかし、タイは、王さま

が生活の一部で最も大切なことなのです。
いろいろな国のいろいろな人たちの生活を経験するのは、とても大切なことだと思います。でも、アメリカ、タイなど国が違えば、考え方も生活も違うけれど、みんな同じ地球に住む人であることにはかわらないのだとも感じています。

「クーパーズタウン」

W校　中等部一年　都甲　健太

僕はクーパーズタウンで開かれた野球大会にタウンのトラベルチームとして出ました。この大会はアメリカ各地から全部で百四チームが参加して行われる、とても大きい大会です。
家から四時間ぐらいのとても田舎にあるクーパーズタウンに着いた時、夢を見ているようでした。フィールドはすごくきれいで、二十二個もあります。泊まるところはフィールドのとなりでした。
次の朝、ユニフォームをもらい、他のチームとピン交換をしました。ピンはチームごとに作っていて他のチームと交換をします。人気のあるチームのピンは手に入れるのが大変で、手に入れられた時はすごくうれしかったです。
その次の日から試合が始まりました。残念ながら、その日は二試合とも負けてしまいました。その次の日も同じ結果でした。三日目はその時上位二十位だったチームとの試合でした。僕たちはまわりのチームがあまりにも強いから、「もう一試合も勝てないかなあ。」とか「ちょっとまずいよねえ。」とか言いながら笑いました。僕たちのチームは負けてばっかりだったからみんな自信がなかったので楽しんでやるつもりで試合に入りました。そのためかチームのみんなはよくヒットを打ちました。だから僕は途中からこれならいけるんじゃないかと思い始めました。
六回表でツーアウト、十八対十一でリードしていました。ピッチャーはアラン。いつものアランはよくヒットを打たれるので僕はセンターからきんちょうして見ていました。カウントワンボール、ツーストライク。アランはキャッチャーのグローブをじっと見ました。バッターがかまえ、アランがふりかぶって投げました。高めのストレート。カキーンーボールが高くあがりました。一瞬やばいと思いましたが、ただのポップフライ。セカンドのアダムがかまえて待っていました。ボールをまだとっていなかったけれど、これはもう決まりだと思い、僕は、走る準備をしました。ボールはアダムのグローブの中に吸い込まれました。僕もチームもみんなうれしくて、ベンチに向かって走りました。みんな飛び上がって三才の子供の様に大喜び、クーパーズタウンの初勝利です。
結果的には、勝ったのはその一試合だけでした。だけど、チームのみんなと協力してその夢みたいな所で野球ができただけでも本当にいい経験になりました。

「私は何人(なにじん)なんだろう」

W校　中等部一年　面　みあ

私は今十二歳です。日本で生まれましたが、四歳の時にアメリカに来て以来、ずうっとアメリカに住んでいます。両親は日本人なので家では日本語をしゃべっています。でも、一日の大半は英語の世界です。
私はこの頃よく思います。「私は何人なんだろう」。日本人の親を持ち、家では日本食を食べて家族の会話は日本語です。でも正

直言って英語の方がだんぜん楽です。漢字の多い日本語の本を読み始めると眠くなりますが、英語はスラスラどんどん読めます。日本語のジョークでは笑えないけれどアメリカのジョークでは大笑いです。母とは、すれ違ってしまいます。

私が日本に住んでいるいとこやこちらに来たばっかりの日本人の女の子と比べて違うなあと思うところを考えてみました。日本の女の子と比べて、私はよく半袖の服を着てズボンをはきます。フリルがついたかわいらしいドレスは着ません。そして性格は積極的で、男の子に対しても、ものおじしないところがあると気づきました。

そうはいっても、アメリカ人の友人たちとも、自分は違うなあと感じることもあります。それはイージーゴーイングなアメリカの友人に比べると学校の勉強やおけいこ事などをまじめに取り組んでいるところです。私は日本語補習校にも通っているし、週末もスリープオーバーやパーティーがなかなかできないことはちょっときびしいと思っています。私の親は二か国語をキープすることは当たり前だという顔で、毎週せっせと私を補習校に連れていきます。何といってもアメリカ人の友達を一番うらやましく思うのはホリデーシーズンです。親せきとにぎやかに過ごせたくさんのプレゼントをもらっていいなあと思います。でもアメリカ人の中でも、私と同じような外国からの家族もいます。そしてふしぎなことにそういうダイバーシティバックグラウンドの友人と気が合うことが多いです。

学校のアメリカ人は宗教を大切にしている人が多いことにも気付きました。私の学校にはユダヤ人が多く、学年の半分くらいを占めています。ユダヤの祝祭日は学校もお休みになります。クリスチャンの子も教会に通っている子が沢山います。ユダヤの寺院やクリスチャンの教会などでそれぞれ宗教を通じてコミニュティができていて家族同士助け合っています。日本人のお友達は私もふくめて、あまり宗教で固まっていません。私は中学校のダイバーシティクラブのヴァイスプレジデントをしていますが、他の人と違うことを認めて、お互いを高め合うことはそう簡単な事ではないと思っています。みんな違って当たり前、色々なバックグラウンドを持つ人のバラエティがあるアメリカは刺激的でおもしろい国だと思うけどまとめることも大変そうです。

日本では二〇二〇年にオリンピックが開催されます。その時、私は十九歳！大学生になっています。その頃には自分が何人かわかっているのでしょうか。私はアメリカも日本も理解できる人になり、オリンピックではボランティアをして、日本と外国をつなぐロープの一本になりたいです。その頃、世界に散らばっている私みたいな「どっちも人」が活躍できる場所が日本にたくさんあるといいなと思います。

「戦争と教育」

L一校　中等部二年　北川　澪那

日本の歴史で最も重大な出来事は、戦争、特に第二次世界大戦だと思う。第二次世界大戦後、日本は戦争したことを最も後悔した国だった。「ピカドン」を広島と長崎に落とされ、多くの人が亡くなった。それをきっかけに、日本はもう戦争を起こしたり、戦争に参加したりなどしないと決めたのだ。これは日本にとって、一番大切な思いだろう。日本をいつまでも平和に、大切にするという意味を込めて、日本は未来に向かって歩んでいる。

戦後は、戦争の痛みと寂しさを分かってもらいたいという作家も多く、いくつもの戦争に関する物語が書かれた。

戦争の物語や漫画は、とても衝撃的だ。ショックが強く、子供に良くない影響があるといって、今になって本に反対する親が増えている。また、戦争の本や「はだしのゲン」のような漫画の貸し出しを制限する図書館も最近、増えてきているそうだ。「はだしのゲン」の貸し出しを止めたり、その本を紹介するのを禁じたりする学校も多くなっている。

私は、これは大きな間違いだと思う。日本は平和を誇りに思う国だ。だからこそ、戦争の痛みや苦しみを人に分かってもらうべきだと思う。また、今の子供たちや生徒はそのことを知るべきだ。「はだしのゲン」は、戦争を行きぬく少年の話で、戦争の激しさ、苦しみ、寂しさを語る本だ。少年ゲンが感じる戦争の悲劇を、子供や生徒が読みやすいように、漫画として描かれた。

戦争が始まったころ、私のおじいちゃんとおばあちゃんは、七歳と八歳だった。毎晩、防空壕で過ごし、昼間は田舎に逃げたり、一日中森の中に避難していたと語っていた。今の時代は、戦争もなく、食べ物も豊富で、幸せに暮らせるのは奇跡だ、と言っていた。小さい頃いろいろなことができなかったおじいちゃん、おばあちゃんは、今の時代をどれだけありがたく思えるか、若い子供たちに知って欲しいという思いがある。ふたりとも、近所の図書館に、「はだしのゲン」の本をもう一度子供たちに貸してあげなさいと伝えたいのだ。

衝撃が強いというだけの理由で戦争のことを教えるのを止めたり、禁じたりするのは間違っている。今、戦争がないのはありがたいけれど、それは歴史に残される悲劇のおかげで、日本が「もう戦争をしない」と誓ったからなのだ。今の平和の理由を教えないということは、日本の最も大切な歴史を教えないのと同じだ。

刺激が強い絵や言葉を、子供に見せたくない、影響を受けさせたくないと思う大人が増えている。衝撃が強いからこそ、貸し出しと販売を進めるべきだと私は思う。衝撃が強いから、戦争への後悔と痛みがよく分かるのだ。絵で見ることができるからこそ、戦争のことが子供にもよく分かるはずだ。「はだしのゲン」を読み、今の世の中がどれだけありがたいものかが分かるのだ。こういう本がなかったら、今の子供たちはどうやって戦争の悲劇を理解できるのだろうか。戦争後すぐに書かれた本だから、戦争に対する気持ちをそのまま人に伝えるには一番頼れる本だと思う。

平和のありがたみを感じてほしいから、「はだしのゲン」のような作品が生み出された。だから、戦争の教育、戦争の本の貸し出しや販売など、すべて進めていくべきだと思う。

「こたつ」

W校　中等部二年　阿部　紘子

日本の代表的な暖房器具はこたつである。私はこたつがないと冬を乗りこえられないほどこたつを愛用している。俗に「かたつむり」をもじって言う「こたつむり」だ。実は意外なことにこたつに似たようなものがイラン、スペイン、アフガニスタンなどに存在する。こたつはたくさんの人々に愛される便利な暖房器具なのである。アメリカや他の国にも広まるべきである。

こたつは簡単に言うとストーブがついているテーブルに布団をかけたものである。暖房器具としての機能はもちろん、安全性や便利性にも優れている。布団でテーブルをおおうことによって

熱が逃げるのを防ぎつつ、使い心地をよくする。また、ストーブがテーブルの裏についているので冷えやすい足を直接温めることができる。さらに、つまみを回すだけで温度調節を行うことができる。最新のものには火事を防ぐために一定の温度を超えると自動的に電源が切れる機能が付いている。それだけではない。最近のこたつは冬以外の季節でも使えるようにデザインが工夫されている。寒くないときは布団を取って普通のテーブルとして使えるようになっているのである。

このように、こたつは暖房器具として非常に優れている。しかし、こたつの魅力はこれだけではない。こたつは複数の人と一緒にくつろげる場所にもなりうる。一般的にこたつは家族で囲むものだ。一家全員でくつろぎ、共に時間を過ごす。別に家族でなくても、こたつは人と人の仲を深めることのできる道具だ。

私とは反対に、こたつには欠点がたくさんあると主張する人もいるだろう。危険だとか電気代が高くなるとか、あるいは人をだらけさせてしまう物だと思っている人もいるだろう。しかし、先ほども言った通り最近のこたつは火事にならないようにフューズ機能が付いているのもある。それに、部屋に暖房を点けるのより、狭い範囲を暖めるこたつの方が安上がりだ。こたつに入るとだらけてしまう人は、その人自身に問題がある。暖房が入っている部屋から出ないのと同じだ。こたつは日々進化している。大昔は囲炉裏の上に机とふとんを乗せたものがこたつだった。今思えばとても危険で不便だ。今のこたつは昔のこたつの欠点が改善されている。まだ欠点があったとしても、未来には改善されているだろう。

以上の理由から、私はこたつが大好きだ。しかし、アメリカにはこたつはない。アメリカには家の中でも靴を履く習慣があるからだろうか。これを私はとても残念に思う。こたつの上でみかんを食べてくつろぐことに私は冬の醍醐味を感じる。以前私の家の暖房が壊れたとき、私はこたつのおかげで寒い思いをしなくて済んだ。今、日本の文化は世界中に注目されている。米などの食べ物や漫画やゲームなどのおかげだ。私はいつかこたつが世界中に注目されてほしい。このとても便利な道具を広めたい。普及させたい。人々にこたつの中で過ごす冬の良さを分かってもらいたい。

「アメリカの生活」

W校　中等部二年　和田　元基

いつも通り日本で楽しく一日を過ごしていたある日、僕は父親の転勤でアメリカに引越しすることを知った。それを知ったとき、頭が真っ白になり、その後次々と僕の中で不安ばかりがつのった。僕はアメリカの生活に全く希望を持つことができなかった。なぜなら、慣れ親しんだ場所へもう行けなくなってしまうこと、また日本にいる親友と会えなくなってしまうことがとても怖かったからだ。そして、最大の理由は、自分の周りで変わってしまう生活についていける気がしないことだった。

その予想通り、アメリカに来てみると今の僕ではついていけないと思えることばかりだった。慣れない外国人に囲まれ、言葉が通じない生活が今でも辛い。しかし、ある体験をして、僕の気持ちは少し変わった。これは先日僕が体験した話である。現地校の数学の授業で式が分からない問題があった。その問題を近くのアメリカ人に英語で質問をした。自分の知る限りの英語を駆使し、勇気を振り絞って質問したのだが、僕の質問はその人には伝わら

なかった。今思えば、日本から来てまもない僕の英語など通じなくてもしょうがないと納得できる。しかしそのとき、僕はショックだった。勇気を振り絞った結果がこれかという落胆しか心に残らず、アメリカで生活していく自信を失いかけていた。しかし、今はその失いかけていた自信を取り戻し、頑張ろうと思える。なぜなら、そのアメリカ人の友達は僕のおかしな英語を必死に理解しようと頑張ってくれたからだ。彼は、根気強く何度も僕の質問を聞き返し、一生懸命に質問の意味を考え、僕に問題を教えてくれた。結局僕の言いたいことは伝わらず、聞きたいことは聞けなかったが、彼のそんなひたむきな態度が、僕はとてもうれしかった。だから、僕はもっと英語の勉強をして、彼に自分の英語を伝えたい、と心から思うようになった。彼が熱心に僕の英語を理解してくれようとしなければ、僕はこんな気持ちになっていなかったと思う。

確かに、まだまだアメリカに来たときと変わらず、辛いと思うことも僕にはたくさんある。それでも、僕はこの体験を経てアメリカの生活についていきたいと思えるようになった。また、日本にいた時と同じように、大好きな場所や、大切な友達をアメリカでも作っていきたいと思えるようにもなれた。アメリカに来ることが不安ばかりで嫌だった僕だが、今はアメリカに来ることが出来て良かったと思う。

「私の夢へグランジュテ」

L－校　中等部三年　モンゴメリー 花子

私は演技だけでなく、ダンスもできる女優になりたいです。私は小さい頃からバレエとタップダンスを習い、現在はジャズダンスにも挑戦しています。とにかく私は踊ることが大好きです。なぜなら自分のそのときの感情を踊ることで表現できるからです。そして学校で嫌なことがあっても、音楽に合わせて踊り始めると、いつの間にか嫌なことをすべて忘れて気持ちが晴れやかになります。ある人は心を癒すためにセラピストに多額な費用をかけるけれど、私にとっての癒しはダンスをすることです。現地校で学年が上がるにつれて宿題も増える中、なぜこんなにもダンスに夢中になるかというと、好きだからの一言に尽きます。

将来的には、踊りを仕事にしたいのでサルサやフラダンス等にも挑戦したいです。踊りの幅を広げることで仕事の幅にもつながると思います。願わくば、ブロードウェイの舞台か映画に出演したいです。そうなれば知名度も上がるしお金もたくさん稼げるようになります。大きな夢を持つことは素晴らしいことだと思うけれど、どうやってその夢を叶えるかが問題です。

女優になる為の第一歩は、演劇や芸術で有名な大学に入ることです。そこでダンスのレッスンを受けたり、文学の歴史などを学び、さらに、女優になるための技術を学びます。それからブロードウェイのショーに出演するためにはオーディションを受けなくてはなりません。倍率は非常に高く、求められる役にぴったりと自分を合わせるのは、至難の業です。だからこそ人よりさらに難しいステップや体の柔軟性を養い、幅広い役に対応できる演技力が重要だと思います。

すべての人が好きな仕事をしてお金を稼げるとは限らないことを、私は知っています。けれど同時に、どうせこの先、生きていくなら自分が嫌いな事をして、嫌々文句ばかり言って生きていくよりも自分が本当に心から楽しんで、それをすることで気持ちが幸せになれるようなことをするほうが健康的で人として自然なことだと思います。「好きこそ物の上手なれ」を私は信じて夢に向かって突き進みます。

「オリンピックの本当の目的」

W校　中等部三年　垰　さくら

東京で聖火が灯される七年後の夏、私は二十二歳。二十歳過ぎた私は、いったい何をやっているのだろうか。色々と人生上手くやっていけているのかとても不安だ。だがそれ以上に、日本の将来が気になる。未来の日本はどんな所なのだろう。テクノロジーはさらに進歩して、新しい発明などあるのか。東日本大震災から九年たった被災地は綺麗になっているのだろうか。オリンピックの話題になる度、私はそんな事を考えてしまう。

オリンピックは、国同士の戦いだけでは無い。オリンピックは、全国共有の体育館のような場所である。地球全体が一つの学校で、オリンピック会場がその学校の体育館。必要な道具が揃っていて、先生の代わりにコーチやトレーナー、審判がいて、みんながふれあい、団結し、フェアにスポーツをプレーするところ。もともとは、戦争の代わりにスポーツで戦って国同士の争いを無くそうとして行われたオリンピック。四年に一度あるこの行事は、いろいろな国の人たちが仲良くなる場所だ。外国との仲を深める絶好のチャンスだが、しかし、オリンピック開催に反対する人も少なくない。その理由は、オリンピックが開催される東京以外の地域にはあまりメリットがないから。その他には、「オリンピックは本当に経済効果があるのか」という意見も。東京でオリンピックを開催するには、たくさんのお金と時間がかかる。まだ七年もあるというのに、日本では税金が上がり、国立競技場の改修も始まる。確かに、東京から遠く離れた地域などにはオリンピックを見に行けない人もいる。そのような人達は税金だけが上がり、ほとんどメリットが無い。だが、オリンピックの本当の目的は経済効果のようなものではないと思う。本当の目的は、たくさんの国の人たちと楽しい時間を過ごすこと。普段日本から遠く離れているヨーロッパやアメリカなどの外国人とは、同じ時間を共に過ごすことは無い。時差や言語の違いが、国々の間に微かながら薄い壁を作っている。私は、オリンピックはこの壁を壊すのにぴったりの場所だと思う。

壁を壊すには、二つの方法がある。一つ目は、いろいろな国の人に日本の文化をたっぷり味わってもらうこと。今では日本のアニメ、マンガ、車や他の電気製品は外国でとても人気だ。しかし、外国人にはまだ日本の事を知ってもらいたい。外国にはない文化や日常の習慣などを教え、もっと日本を知ってもらう必要がある。二つ目は、自分の国を応援し、思いっきり戦うこと。オリンピックは、国の人全員がプレーできる。もちろんオリンピックで戦うためには、それまで沢山努力をし、いくつも大会に優勝しないといけない。そう簡単には出場できない。だが、その選手たちを応援するのも一種の「プレー」だと思う。私は、日本人の応援の仕方がとても好きだ。ニューヨークに住み始めてから、何度も野球の試合を見に行った。私の他にも、イチロー選手や黒田投手を見

に、たくさんの日本人がいた。アメリカ人は、嫌いな選手がバッティングに出たり、ミスをするとすぐにブーイングをする。しかし、周りに座っている日本人の口からブーイングは一切出ない。その代わり、「がんばれ！」と応援したり、看板などを作ったりする人がたくさんいる。このような温かい応援ができるのは、日本人のすごいところだと思う。

オリンピック開催にはもう一つ、重要な目的がある。それは、東日本大震災の復興だ。一部の人は、「なぜ東日本大震災の復興のためにお金を使わず、オリンピックに使ってしまうのか」、「オリンピックが被災地の復興を遅らせる」と思っている。だが私はそうは思わない。日本でオリンピックを楽しんでもらうために、私たち日本人は団結し、七年間準備をしなければいけない。この努力は、きっと復興につながると思う。日本人の間に繋がりができ、遅らせるどころか進むに違いない。オリンピックが終わった後も、外国との間に出来た絆が日本に力をくれると思う。寄付金よりも、外国からの温かい言葉が一番復興に役立つと私は感じた。

このように、オリンピックは経済効果のために開催されていない。七年後の東京オリンピックを成功させるためには、団結し協力して準備しないといけない。私は、「未来の日本が気になる」と言ったが、どんな未来にするかは私たち次第だと気づいた。自分はこのオリンピックで何か得をするのだろうか、と考えるのではなく、この全国共有の体育館を皆で楽しめる、最高の場所にすることが一番大事だと思う。

「日本人として考えなければいけないこととは」

W校　中等部三年　三井　寛子

二〇二〇年に開催が決定された東京オリンピック。多くの日本人が喜びの歓声につつまれたことであろう。現に私も東京に決まったと知った時、声に出して喜んだ。もう、こんなにも奇跡的なことはないというように。もし、私がこの東京オリンピックを体験することができるのならば、それは私にとって二度目の体験になるからだ。私にとって一度目とは、一年前に行われたロンドンオリンピックである。今回開催地が東京に決まったことによって、一度目に体験したロンドンオリンピックを踏まえて、深く考えさせられたことが二つあった。

まず一つ目は、自分は一体どれだけ日本のことを知っているのだろうということだ。私は、一年前の二〇一二年に行われたロンドンオリンピックの時、丁度ロンドンに在住していた。街中は、オリンピックが近付くにつれ景色が変わっていき、友達との会話までオリンピック一色となった。店のあちらこちらに五輪のマークがついた記念グッズが売られ、道路にはオリンピック開催を示す旗も付けられた。そしてロンドンオリンピックボランティアのスタッフが街中で地図を配ったり、案内をしたりと忙しそうにしていた。この光景を見て初めて自分はオリンピックの開催地にいるのだと実感することができた。

はじめに行ったのはなでしこジャパンの準決勝だ。私たちは、ユニフォームのレプリカを着ていたので、電車に乗って移動している間に知らない人によく声をかけられた。ある時、ふと老人夫婦が私たちにこう聞いた。

「日本の国歌はどういう意味が込められているの？」

私は、その時答えることができなかった。もちろん、君が代は知っていたし歌うこともできた。しかし、今まで意味なんて考えたことがなかったからなんて答えていいかわからなかったのだ。自分の母国の国歌の意味を答えることができないほど、恥ずかしいものはないと思った。きっと私たちに質問をした老人夫婦も母国の国歌の意味が分からないなんてと思ったに違いない。しかし、私はその時、自分の日本の知識度を初めて知ることができたのだ。大人になる前の子供の時期にこれに気付かせてくれたことを私は感謝したいと思っている。もちろん、恥をかいたことは事実だ。しかし、それよりもっと得たものの方が大きかったのではないかと思う。そして、その時から私は、日本人として知っておくべきことが他にも沢山あるのではないか。そしてそれらを知って初めて自分が日本人であることを確信するのではないかと思った。

二つ目は、日本人の英語力で外国人選手や観光客とコミュニケーションをとることはできるのだろうかということだ。オリンピックが行われるにあたって、大勢の人々がボランティア活動を行う。例えば、街中でその開催地の地図を配ったり、案内したり。それ以外にも、会場内で直接選手のヘルプをする人など様々だ。しかし、これらのボランティア活動をするには世界各地から人々が集まるため英語が必須となってくる。だが、今の日本人の英語力はどうであろうか。とても、外国人に対応できるような英語力はない。これは、私が海外に在住するようになって個人的に感じたものだが、日本人は他の母国語が英語でない国に比べても、全くと言っていいほど英語力が欠けている。特に問題なのが、スピーキングだ。しかし、こんな大きな問題を七年間で改善することができるかといったら不可能に近い。そこで私は、ここは日本中の帰国子女の出番なのではないかと考えた。私たちは、東京オリンピックが開催される二〇二〇年、大学四年の二十二歳だ。まだ社会人になっていない大学生の夏には、このボランティアは最高な形での東京オリンピックへの貢献だと思う。だから私は、是非このボランティアの一員として活動したいと思っている。

これらは、私のオリンピックまでの目標であり、日本人の目標でもあると思う。そう容易なことではないが私たちがやるべきことだということに間違いはない。もし、達成すればそれは東京オリンピックにそして日本にとって大きな利益になるだろう。私が今回このようなことを感じられたのも、一年前の体験によって得たものがほんとうに大きく今やっと感じられ、そしてそれをまた生かせたことがとても嬉しい。

「差別とは」

L－校　高等部一年　柴田　奈央美

最近私は、「人」という生き物について考えることが多い。私たち人間は、一人一人違う。顔の特徴、目の色などの見た目、好きなものや嫌いなもの、そして考え方。それでもみんな同じ人間であることには変わりはない。

それなのに、昔も今も、世の中では性別、人種、思想などを基にして、人が人を否定したり、見下したりしている。そんなこと、今更述べるほどのこともない、ごく当たり前のことなのかもしれない。私が住んでいる、この自由の象徴とも言うべきアメリカでさえ、長年にわたって人間が人間を差別してきたのだから。私たちの世代になって、差別はかなり減少したと思う。だが私の身近なところでは、差別が今でも目につくのだ。

ある日、現地校で担当の先生が急用で欠席したため、代理の先生が入っていた。ちょっと年配の白人の女性だった。代理の先生が来ると、先生にちょっかいを出したい衝動に襲われるクラスメートがいる。その日も、ある生徒が大きな声を出し、先生を挑発し始めた。それに続いて男子何人かが叫び出した。教室が動物園と化すのに終止符を打ったのは、当然先生だった。しかし、叫んでいた生徒たちではなく、騒ぎとはまったく無関係だった子が叱られ、クラスの見せしめとして教室から追い出された。

先生のこの行為でさすがに生徒たちは怒り出し、またひどい騒動が始まった。結局、また何人かが教室からつまみ出された。何もしていない生徒が追い出される理由はどこにもない。先生のしたことがあまりに理不尽で、私には理解できない。ちなみに騒ぎを起こしていた生徒たちは白人で、つまみ出された子は黒人だった。

別の日、歴史の先生から、学校で生徒に襲われ、怪我してしまったと聞いた。授業中、ヘッドフォンをして寝ていた生徒を先生が注意しにいったときだった。腹を立てたその生徒は、先生を押し倒し、それから暴走してしまったのだという。先生は喉を締め付けられて、背中にひどい打撲、脚にいくつかの傷を負った。そのせいで学校を一週間休んでいたそうだ。先生はこう語った。

「入院中、一番胸が痛んだのは、いろんな人たちから『襲ってきた子、黒人だったでしょう。』と繰り返し言われたこと。先生を襲う生徒ならそれは黒人に決まっていると、なぜ決めつけるのだろう。ふざけるな、と言いたいね。」

今の社会では、子供や大人に関係なく差別が多発している。友人との会話のなかでも、ジョークとはいえ人種差別を感じることがあるし、「男の子だから泣いてはいけない」という親たちの教えのなかにも、差別が見え隠れする。

私は、多くの人が「区別すること」と「差別すること」を意識していないのではないかと考える。「区別」と「差別」は根本的に違う。「区別」することは、人がお互いに異なる個性、能力や特徴によって違いを表し、主張することである。それぞれに違った特色が備わっていることを指摘するだけであり、その結果、何かが変わるわけではない。

一方、「差別」の場合は、ある基準を定めることによって、何かが変わることである。東洋人は頭が良い。男性は女性より強いなどといった基準から来ているものが多い。

元来、人間は、アフリカで誕生した同じ祖先を持つ生き物だと、歴史で習ったことがある。同じ生き物なのにどうしてお互いを拒み、見下すのだろう。差別という理不尽なことがなくなればいいのに、といつも考える。

そのためには、一人一人が努力してお互いを受け入れることが必要だろう。みんなが暮らしやすい社会を作るためには、私たちの生活のなかで当たり前になっている差別の存在に気づき、意識してなくしていくことが必要なのではないだろうか。そして人々が「差別」をやめ、「区別」へ意識を変えることで、世の中が変わるのではないか。

「みんなちがってみんないい。」

金子みすずの詩の一節だ。この地球には七十二億の人間が住んでいる。知能、性格、外見などがまったく同じ人間は、この世界にいない。みんなの違いを受け入れて、ともに過ごすことができれば、どんなに良いだろう。現実社会の人間関係の複雑さに今日も

頭を悩まされながら、私はそれが可能になればいいなと思っている。

「補習校で学んだこと」

W校　高等部二年　安倍　結花

「補習校」、目を閉じて、その場所を思い浮かべてみる。教室、机、スマートボード、先生、そしてクラスのみんな。十一年間あたり前のように通っていたこの場所で私は一体何をしていたのだろう。そして何を学んで来たのだろう。

それは日本語だろうか、数学だろうか、それとも日本人の友だちの作り方だろうか。どれもが正解であり、同時にどれもが不正解であるように思う。なぜなら私は補習校で、国語よりも、数学よりも、もっと大きくて、もっとかけがいのないものをもらったのだから。

初等部の一年生から通っていた補習校は自然と私の一部となっていた。英語がしゃべれるようになり、やっと認めてもらった友達に遊びに誘われても、行けない理由はいつも補習校だった。金曜の夜はいつも補習校の宿題。現地校のクラスメート達もだんだんそれにこりて誘わなくなり、いつの間にか私は「エイジアンナード」「エイジアンのガリ勉」というレッテルを貼られていた。少なくともその時の私は、そんな気がしてたまらなかった。「私はただの静かで真面目な子じゃない」「一人でいるのが好きなだけの子じゃない。」。私の中には大きな世界が広がっているのに、私なりの夢や目的があるのに、全部みんなに見せて受け止めてもらいたいのに、補習校に行っていることで、私が日本人であることで、みんなに私をわかってもらえない。そんなことがものすごく気にかかっていた。当時補習校は、私の中から消したい一部でもあった。

でも、そんな補習校を親の説得で続けるにつれ、私の考えが間違っていたことが分かってきた。中等部二年生位になると、私と同じようにアメリカに長く住んでいる仲間に出会うようになった。その子達も私と同じような悩みを持ち、同じように二つの文化に挟まれ、つらい思いをした経験をしていた。お互いのことを分かり合えるクラスメートと友情を深め、彼らの補習校でも現地校でも頑張っているたくましい姿をみているうちに、自分のことも少しずつ見えてくるようになった。現地校の人達とちゃんと向き合えていないのは、補習校のせいではなく、私が自分から隠していたからだったのだ。たぶん私はどこかで、お互いのことを分かち合おうとすることをあきらめていたのかもしれない。

それが分かると、いつの間にかやる気がわいてきた。自分の中から消したい場所だった補習校が、自分を変えてくれる心の支えの場所に変わって行った。現地校で何があっても、失敗しても、笑っても、泣いても、補習校はいつだって補習校で、唯一変わらない私のいるべき場所だった。「私には帰ることのできる場所がある」そう思うと現地校のみんなと向き合う勇気が出て来た。そうして少しずつ私の身の回りは変わって行った。

今まで補習校をやめようと思ったことは数えきれないほどあった。勉強は難しく、漢字が読めない。現地校の学習だってある。でも私は今、あきらめないで補習校に通い続けさせてくれた両親や、先生達に心から感謝している。

補習校のおかげで私は、何が何でもあきらめず、向き合い続けることの大切さと、分かち合えた時や達成した時の悦びを覚えた。

それは決して簡単なことではなかった。人とあきらめずに向き合うことも、始めたことをあきらめずにやりとげることも、実際にやってみると、その難しさが身にしみて感じられた。

でも、今は同じだけ感じる。これから先、苦労して学んだ国語の漢字や、先生が一生懸命教えて下さった数学の公式などが全て頭から消え去ったとしても、絶対に忘れないことがある。

補習校に通い続けたことで私が得た「継続する力」の大切さは、これからも私の未来につながり、私を成長させてくれるに違いない。